

令和元年度
研究集録

川越市教育委員会委嘱学校研究
川越市教育委員会指定学校研究



川越市教育委員会

川越市教育委員会教育長

新保 正俊

令和元年度学校研究の成果を、ここに「研究集録」として刊行することになりました。川越市教育委員会委嘱学校研究11校、研究指定校6校、指定学校研究6校が、全職員の協力のもと真摯に研究に取り組まれたことに、心から敬意と謝意を表します。

社会が急速に変化し、予測が困難な時代を迎える今、学校教育には、子ども達が様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくことや、様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し、情報を再構築するなどして新たな価値につなげていくこと、複雑な状況変化の中で、目的を再構築することができる力を育むことが求められています。

川越市教育委員会では、第二次教育振興基本計画の基本理念を「生きる力と学びを育む川越市の教育」として、次代を担いたくましく生きる児童生徒の育成のため、様々な取組を推進しております。また、各学校においては、学校教育に関わる様々な取組を、教育課程を中心に据えながら組織的かつ計画的に実施し、教育活動の質の向上につなげていくこと、いわゆるカリキュラム・マネジメントに努め、特色ある学校づくりに取り組んでいただいているところです。

こうした中、研究校では、自校の実態や課題を的確に把握した上で研究主題を設定し、教員の資質向上や指導方法の工夫・改善、学習環境の整備等、教育活動をより深化・充実させ、本市の課題である学力向上の実践を重ねてこられました。

各学校の研究成果は、他者との豊かな関わり合いの中で互いを認め合う児童生徒の姿、できる喜びを感じて主体的に学習する姿、自らの考えに自信を持ち伝え合う児童生徒の姿など、子ども達が学びを深めていく姿となって表れております。特に、委嘱学校研究2年次の9校につきましては、学校の特色を生かした研究の成果を発表され、多くの示唆を与えていただきました。

各学校におかれましては、本集録にまとめられた研究内容や成果を、個々の学校の状況に応じて教育活動をより活性化するための具体的な手立てとして積極的に活用されることを期待しております。そして、自信をもって自分の人生を切り拓き、よりよい社会を創り出していくことができるような子どもを育成するために、その取組を一層推進していただきたいと思っております。

結びに、研究に携わってこられた各学校及び地域・保護者の皆様の御尽力と、御指導いただいた関係各位に改めて感謝申し上げます。

研究主題

「個性を伸ばし、創造性を育む学習指導の充実」

～算数科のスタンダードを他教科にひろげて～

学校名 川越市立川越第一小学校

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本研究は、平成28・29年度の学校研究「個性を伸ばし、創造性を育む学習指導の充実～思考力・判断力・表現力を伸ばす算数科のスタンダードを求めて～」で確立した、本校「算数科のスタンダード」が他教科にも適用できるかについて、授業を通して検証していくことを目的として、平成30年度よりスタートした。本校の「算数科のスタンダード」が定着してきたことにより、児童が見通しをもって学習することができるようになり、児童同士の話し合う機会が増えて、自分の考えを発信できるようになったということを教師も実感している。そこで、主体的・対話的で深い学びの実現と、児童の思考力・判断力・表現力等を育成する学習指導の充実、そしてその根本となる教師の授業力の向上のために、本校児童が、算数科の授業を通して身に付けた学び方（問題解決の学習過程を意識することやノートの使い方、ペア・グループでの話し合いなど）を、他教科にひろげ生かすための研究を進めた。

(2) 研究主題設定理由

本校の学校教育目標である「次代を担い、心豊かでたくましく生きる児童の育成」の具現化を目指し、研究主題を「個性を伸ばし、創造性を育む学習指導の充実」とし、次のように共通理解をした。

- ①「個性を伸ばす」…自分がよりよくなるよう、自分をよりよくしようとする個々の思いや考えを、互いに尊重し、認め合う中で、考える楽しさ・学ぶ喜びを感じられるようにすること
- ②「創造性を育む」…既習事項を生かして、新たな考えを創り出す力を伸ばすとともに、全体での学習場面において多様な見方やよりよい考え方、発想を生み出し、主体的・対話的に問題を解決していくために必要な能力を育成すること

これにより、互いに認め合い、高め合える人間関係の中で児童が豊かな心を育み、さらには、自信をもって自分の考えを発信できるようになることで、これからの多様化する社会をたくましく生きる児童の育成ができると考え、本主題を設定した。

そして、めざす児童像を以下の3つで示した。

- ・自分の考えをもつ子
- ・自分の考えを発信できる子
- ・自分の考えを深められる子

(3) 研究組織

本校の「算数科のスタンダード」をひろげる対象として、国語科・社会科を設定し、それぞれ公開授業研究会を行うこととした。

また、他校の教職員から研究員を募り、教材研究、指導案検討の段階から参画できることとし、ともに研究を進めることができるようにした（オープン化）。

2 研究の内容

(1) 国語科研究

めざす児童像に向けた研究の視点

- ① 「自分の考えをもつ子」については、説明的文章や文学的文章等の叙述を読み取り、自分の考えをワークシートやノートに書くことができる姿と捉えている。そこで研究の視点①として、「教材・学習活動の工夫」を図ることとする。
- ② 「自分の考えを発信できる子」については、ペア学習やグループ学習に進んで取り組み、自分や友達の考えを、文章や音声で伝え合うことができる姿と捉えている。そこで研究の視点②として、「話し合い活動の工夫」を図ることとする。
- ③ 「自分の考えを深められる子」については、グループ活動や全体発表の中で、友達の考えと自分の考えを比べたり、そこで得た学びを生かしたりできる姿と捉えている。そこで研究の視点③として、「自力解決の時間の確保、学習活動の工夫」を図ることとする。



(2) 社会科研究

めざす児童像に向けた研究の視点

- ① 「自分の考えをもつ子」については、資料をしっかりと読み取ることができ、その上で複数の資料を比較したり事実と事実の関連をとらえたりする姿をとらえている。そこで研究の視点①として「資料の比較・関連を意識した学習活動」を設定した。
- ② 「自分の考えを発信できる子」については、根拠となるものを示しながら発表したり、お互いの考えを整理したりしながら交流する姿をとらえている。そこで研究の視点②として、「グループ学習の充実」を設定した。
- ③ 「自分の考えを深められる子」については、調べ学習や話し合い活動の中で、よりよい考えに気付いたり、社会に見られる課題を解決していこうとしたりする姿をとらえている。そのためには、単元を貫く学習問題をはじめ、全ての学習過程において児童の問いを連続させながら学習活動を進めていく必要がある。そこで研究の視点③として「問いを大切に学習課程の工夫」を設定した。

3 実践事例 社会科 小単元名「自動車をつくる工業」(5年)

(1) 授業の実際

【つかむ】

① 本時の問いを知る。

資料を提示し、連続的な問いを投げかけ、本時の問いに繋げる。

Q1: 自動車の生産台数は今後どうなるか。

Q2: 中国の空の写真を見て気付くこと。

Q3: 交通事故の発生件数は今後どうなるか。

問い: これからは、どんな自動車づくりが大切なのでしょう。



【調べる】

② 自分で調べる。



探す際の視点を与える。

- 1 箇条書きでたくさん書く。
- 2 選んだ理由も考えておく。

個別支援で、苦手な児童にヒントを与える。
全児童一つは考えを持てるようにする。

③ 少人数で話し合う。

話す際の視点を与える。

- 1 班で話し合い2つにしぼる。
- 2 みんなが納得する理由を考える。



私は〇〇だからだ
らだと思う。
理由は□□。

この理由なら、
みんなも納得
してくれるね。



④ 全体で話し合う。

話し合った内容を整理し、視覚化
できるように短冊を活用する。

発表者の理由の中から、まとめに
つながる言葉を全体で共有する。



調べた資料にないものを
映像資料等で補足説明
し、知識を深める。



【まとめる】

⑤ 自分の言葉によるまとめをする。

今日の授業を振り返り、児童の言葉でまとめ
をする。その後、全体に発表する。

⑥ 振り返りをする。



新たな問いを生むよう
な資料を提示し、次時
につなげる。

(2) 指導講評 川越市立福原小学校校長 生駒 義郎 先生

- ・社会科でのグラフの読み取り方「全体の傾向」「部分着目」「未来予測」の視点で。
- ・予想を立てるときは、暗黙知を使わせることが効果的である（視点を与える）。
- ・調べる活動では、事実と自分の考えを書かせる。
- ・3人組の話合いでは、いくつかは絞らせ子どもたちに判断をさせる。そうすることで自然と理由が付いてくる（5W1Hの使い分けも指導できるとよい）。
- ・全体での話合いの場では、教師は多くを語らず、「問い」を返して進行する。
- ・まとめは、教師の言葉でしっかりと書く。
- ・振り返りでは、疑問に思ったことや新たな問いが書けるとよい。

4 研究の成果と課題

(1) 国語科

① 成果

- ・ 単元計画を作ったり、言語活動のモデルを見せたりすることで、単元を通して児童が見通しを持ち、意欲的に学習に取り組むことができた。
- ・ 考える前に叙述を確認しようとする意識が児童に身についてきた。
- ・ ペアや3人グループでの話し合い活動を、国語の授業でも計画的に取り入れることで、徐々に話し合いに慣れてきている。
- ・ 算数科スタンダードの、めあて→自力解決→話し合い(学び合い)→全体での練り上げ→まとめ→振り返りの学習の流れを取り入れることで、国語の授業でも児童が見通しを持って学習に臨めるようになった。

② 課題

- ・ 1、2年生の3人組での話し合い活動は難しかった。1、2年生は、まずベースとなるペアでの伝え合いの経験をしっかり積ませることが大切だと考えられる。1、2年生で3人組での話し合いを行う際は、話型の提示や、話し合う内容を明確する等の配慮が必要だと考えられる。
- ・ 低学年は学び方の基本を身に付ける段階であるため、算数科スタンダードの、めあて→自力解決→話し合い(学び合い)→全体での練り上げ→まとめ→振り返りの学習の流れを授業で取り入れられるまでに一定の指導時間が必要である。

(2) 社会科

① 成果

- ・ 研究の視点ごとの手立てを明確にすることで、学校全体で一貫性のある指導を行うことができた。
- ・ 問いの構造図を活用し、1単位時間ごとの問いを予め考えて設定しておくことで、見通しを持った学びに繋げることができた。
- ・ 問いの連続性を意識した授業展開を行うことで、児童の問いを繋げ、学ぶ意欲を継続させることができた。
- ・ 板書の3分割や略語表記等の算数科スタンダードを社会科でも活用することで、どの学年でもスムーズな学習につながった。
- ・ 算数科のスタンダードで確立させた3人組の話し合いは、社会科においても効果的であった。

② 課題

- ・ 社会科は教えるべきことも多く、どの場面で少人数での活動を行うのか見極め、選択することが必要である。
- ・ より理解を深めるために効果的な資料はどのようなものか、教師自身がより深く教材と向き合い、研究をしていくことが重要である。
- ・ 児童自身が学習問題をたてるためには、児童が「なぜ」をもっと感じるような資料をさらに用意することや、引き出す発問を多く考えておく必要がある。

研究主題

「豊かなかかわり合いの中で、今と未来にいきる」 ～教科等横断的な資質・能力を育成する～

学校名 川越市立川越小学校

研究のポイント

- 3つの『学び』の授業づくり11の視点を用いた授業研究と教育課程の工夫・改善
- 学習集団（話し合う力）やリーディングスキル（読解力）の育成
- カリキュラム・マネジメントの視点をいかした教科等横断的な単元配列表の作成

1. 研究の概要

(1) 研究のねらい

本校は、目指す学校像「川越小の伝統を守り、未来を生き抜く力を育てる」～豊かにかかわり合い、歴史を創造する～に示されている通り、147年目の歴史と伝統を大切にし、地域との深いかかわりのもと、日々の教育活動を進めている。平成22年度からかかわり合いを基盤とした学習の研究を行っており、平成30年度・令和元年度の本研究では、「豊かなかかわり合いの中で、今と未来にいきる」を研究主題として、主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善と子供たち一人一人の基礎学力の定着、教科等横断的な資質・能力を育成するよう取り組んできた。「いきる」には、「生きる」と「活きる」の2つの意味があり、学んだことを教科等横断的に活用し、今と未来に活かして生きて抜いていく子供たちを育成することをねらいとしている。

(2) 研究主題設定理由

テクノロジーの急速な進化により予測不能な未来を生き抜く上では、子供たちが「21世紀型スキル」を身に付けることが必須である。平成28・29年度の研究では、「学びの実感」「協働的な学び」「主体的な学び」の3つの『学び』の視点から授業を構築し、子供たちが未来に向けて臨機応変に対応できる能力を育成してきた。それを礎とし、新学習指導要領の実施に向け、豊かなかかわり合いの中で主体的・対話的で深い学びを実現する授業づくりを行うとともに、全教職員が教科等横断的な視点をもって単元を構成することが重要であると考え、本主題を設定した。

(3) 目指す児童像

【主体的な学び】

基礎的基本的な知識・技能を習得して、学習内容を理解し、学びに向かう力を身に付けていく姿

【学びの実感】

自己の成長や変容に気付き、達成感を覚え、意欲の高まりや自分のよさを感じている姿

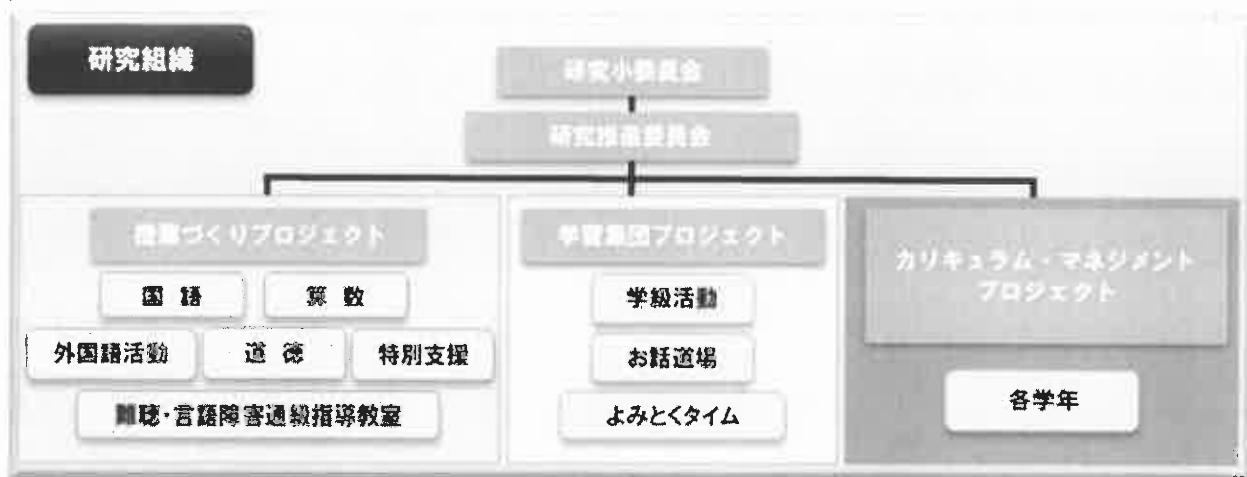
【対話的な学び】

身に付けた知識・技能を活用して、課題を解決し他者とかわり合い思考が広がっていく姿



【川越小学校研究構想図】

(4) 研究組織

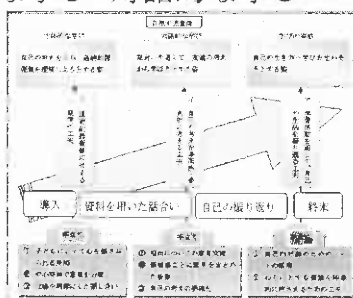


2 研究の内容

3つの『学び』と11の視点をいかした授業研究

本研究で、特別活動、国語科、算数科、外国語活動、道徳科、特別支援教育、ことばきこえの7教科・領域で授業づくりを行った。

教科・領域のテーマを決め、それを基に3つの学び(主体的な学び・対話的な学び・学びの実感)の姿を作成した。授業づくりの際は、この目指す子供の姿をゴールに授業を構築していく。



川越小 3つの『学び』の授業づくり-11の視点

- 視点1 学習内容・学習活動を吟味する。
- 視点2 導入の工夫改善をする。
- 視点3 発問や言葉かけを想定する。
- 視点4 問題意識を高める学習内容、学習課題を設定する。
- 視点5 学びを外化し、可視化する。
- 視点6 思考力・判断力・表現力を育むために言語活動を充実させる。
- 視点7 個の学びを充実させる。
- 視点8 学び合い活動の学習形態をくふうする。
- 視点9 学習内容を身近な生活やこれまでの生活経験と関連させる。
- 視点10 学習活動の振り返りを充実させる。
- 視点11 学習内容の成果を、これからの生活に活用したり、いかしたりする。

【11の視点】

【各教科・領域の3つの『学び』と工夫】

教科等	教科等のテーマ	3つの学びの姿	工夫
特別活動	自分からそして自分たちで活動する子供	<ul style="list-style-type: none"> ○自分の考えをもち、自分から取り組む姿 ○友達のを考えを生かそうとする姿 ○よりよい自分への変容をめざす姿 	<ul style="list-style-type: none"> ●実践までの見通しを持ち、主体的に活動する工夫 ●子供の思考を可視化する工夫 ●自他の成長に気付き次の活動へ生かそうとする工夫
国語科	自分の言葉で表現することで学び合い、さらに思考を深める子供	<ul style="list-style-type: none"> ○根拠を明確にして思考・表現する ○論理的な思考で、意見を伝え合う姿 ○養った力を日常生活に活用しようとする姿 	<ul style="list-style-type: none"> ●子供が自ら学ぶ意欲を高める工夫 ●自分の意見を明確化できる言語活動の充実 ●課題解決できた喜びを次の学習につなげる工夫
算数科	数学的な見方や考え方ができる子供	<ul style="list-style-type: none"> ○生活経験や既習内容を生かし、進んで自力解決していく姿 ○他者とのかかわり合いをもとに、より良い解決方法を考え実行していく姿 ○他教科での学習や日常生活に算数の学びを活用していく姿 	<ul style="list-style-type: none"> ●多様な考え方を引き出す工夫 ●数理的な処理のよさに迫る工夫 ●習得した知識を生活に還元する工夫

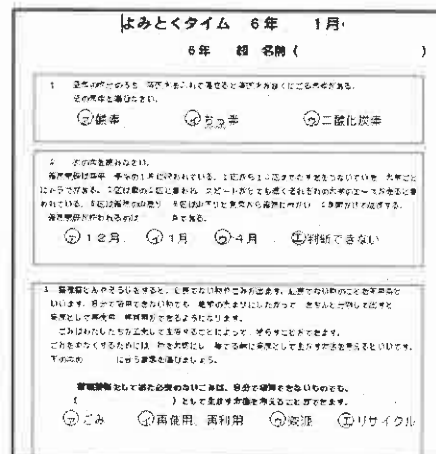
外国語活動	積極的にコミュニケーションをとる子供	<ul style="list-style-type: none"> ○楽しく英語を使おうとする姿 ○友達とコミュニケーションを図ろうとする姿 ○多様な言語や文化のよさを受け止めようとする姿 	<ul style="list-style-type: none"> ●伝わった喜びを味わわせる工夫 ●言いたい思いを伝えるための工夫 ●細かなステップを踏んだ「話す聞く読む書く」の工夫
道徳科	自己の生き方を考える子供	<ul style="list-style-type: none"> ○自己の考えをもち、道徳的諸価値を理解しようとする姿 ○話し合いを通して友達の考えから学ぼうとする姿 ○自己の生き方へ学びを生かそうとする姿 	<ul style="list-style-type: none"> ●道徳的諸価値にせまる発問の工夫 ●自己の考えを多面的・多角的に考える工夫 ●学習活動を通して、自己の生活を振り返る工夫
特別支援教育	友達の意見を聞いて、自分の考えを深め実践する子供	<ul style="list-style-type: none"> ○自分たちで決めて、みんなでやる ○友達の意見を聞いて、よりよいものを決めようとする姿 ○実践したことを振り返り、みんなでできた喜びや次への活動を期待している姿 	<ul style="list-style-type: none"> ●自分の意見を持ち、発表できる工夫 ●友達の話を聞き合い、意見をまとめていく言語活動の充実 ●実践と振り返りの充実の工夫
ことばきこえ	肯定的な自己意識をもつ	<ul style="list-style-type: none"> ○吃音にとられえず楽しく表現できる姿 ○自分にとって楽な話し方で、考えを表現できる姿 ○自己肯定感が高まり、意欲的に生活できる姿 	<ul style="list-style-type: none"> ●環境調整や学習内容の工夫 ●グループ学習を通しての多様な経験 ●ことばの教室と保護者・在籍校との連携

3 実践事例

(1) よみとくタイムとRST（リーディングスキルテスト）

子供の基礎学力育成のため、全教員で問題を作成した。毎月1回、業前の時間に「よみとくタイム」を実施し、読解力向上につながる問題を繰り返し解くことで問題を正しく読み取る力を付ける。自分で解いた後、答えの理由を友達と話し合うことで、答えを確かめ、学び合いを行う。下表のように問題数と時間、内容は低中高で変えている。

学年	問題数	流れ	留意事項
低学年	5問	①解答（7～10分） ②答え合わせ ③振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・低学年のうちは、話し合いは行わず、代わりに振り返りを行う。
中学年 高学年	中：10問 高：15問	① 解答（7分） ② 話し合い（2分） ③答え合わせ	<ul style="list-style-type: none"> ・友達と根拠を明確にして話し合う。 ・答えは書き換えてもよい。 ・解いた問題についてのみ話し合う。
特別支援 学級	3問	①解答（7分） ② 答え合わせ ③振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・3問を丁寧にやる。答え合わせの時間を多く取り、しっかりと解説する。



RSTを参考に本校独自の問題を作成

5・6年生を対象に国立情報学研究所で開発された読解力のレベルを測る「リーディングスキルテスト（RST）」では、全国の小学生よりも成績は高かった。タブレットを使ってのテストであったが、よみとくタイムで読解力を問う問題に慣れていたため、集中して取り組むことができた。

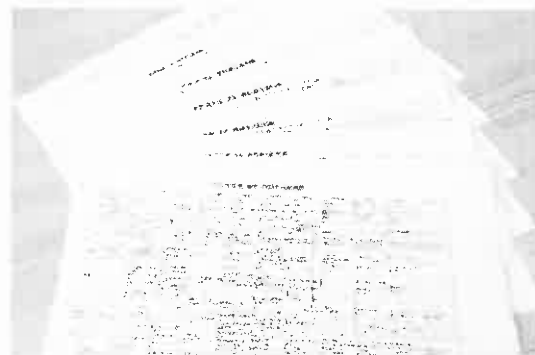
(2) 振り返りの充実

教科ごとに視点を明確に、ノートによる振り返りを行った。算数科では、過去（学んだことでいかせたこと）、現在（本時の学習で大切なこと）、未来（どういかせそうか）という3つの視点で振り返りを行う。学習と生活を関連付け学びの実感を得ることができる。子供も前時のつながり、他教科とのつながりを意識できるようになる。



(3) 単元配列表の作成

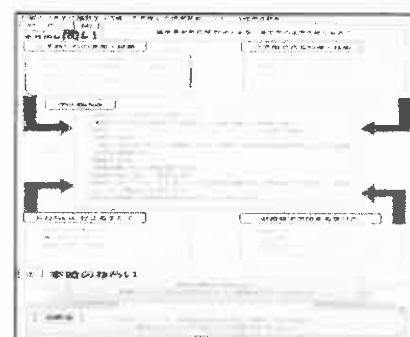
総合・生活科を中心に、単元配列表を全学年で作成した。一つの単元で学習した内容を他教科等の学習と結びつけることで、教科等横断的な学習が展開できる。同じ教科や他教科等で学びの関連が強いものや、思考ツール・表現ツールで活用している内容を赤線で結び、教科等横断的な資質・能力を育成するための教育課程改善につなげることができる。



【単元配列表】

(4) 逆向き設計（授業計画シート）

「逆向き設計」では、「本時のねらい」から単元構成を行うことで、子供に身に付けさせたい力を軸に授業を構築することができる。A4用紙1枚にコンパクトに作成し、研究授業前にすべての教員に周知し授業を展開する。



【逆向き設計】

4 研究の成果と課題

(1) 主体的な学び

○ねらいを明確にした授業構築や基礎的読解力を高めたことで、子供が主体的に課題に取り組む姿勢が多く見られた。

△主体的な学びを支える基礎的読解力の向上のため、朝の活動（よみとくタイム、お話し道場）に継続して取り組む。

(2) 対話的な学び

○授業改善のための11の視点の手立てにより、子供たちの豊かなかかわり合いが助長され、よりよい考えや深い学びにつながった。

△自分の考えをもって話し合いに参加するための思考ツールやノート指導の在り方について研究を深める。

(3) 学びの実感

○教科等横断的な視点で教育課程を整理したことで、学習したことを教科の枠を越え生活にいかそうとする姿が見られ、学びの実感へとつながった。

△学びの実感を見取る評価規準や評価方法についての研究を深める。生活科、くすのき（総合的な学習の時間）を中心とする教育課程の改善を図る。

研究主題

「よりよい学級・学校生活づくりに主体的に参画する児童の育成」

～児童の主体性、自治的能力を育成し、自己肯定感を高める学級活動の実践～

学校名 川越市立武蔵野小学校

研究のポイント

- 学級活動（１）の研究を通し、児童の自己肯定感の向上をはかる。
- 学級活動ハンドブックを作成することで、話し合い活動の進め方のスタンダード化をはかり、どの学級でも充実した学級会が行われるようにする。

1 研究の概要

（１）研究のねらい

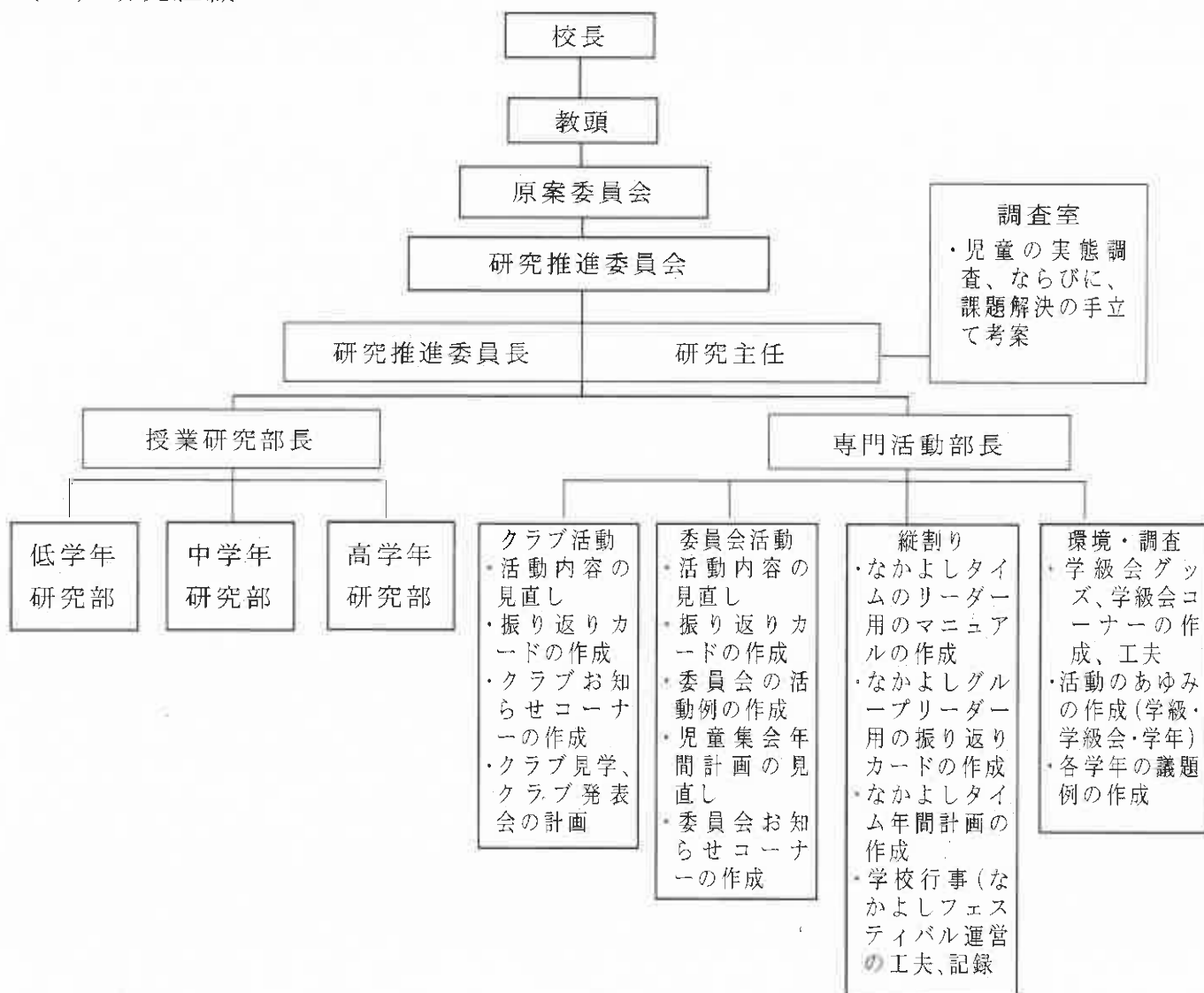
本校では、平成29年度より、児童の主体性、自己肯定感の向上を目指し、自己有用感をはぐくむことに主眼を置いて学級活動（１）の研究を進めてきた。特別活動の研究を始める前年度の埼玉県学力・学習状況調査の質問紙調査では、発表することが好きと答える児童が少なく、児童の自己肯定感に課題があることが分かった。また、自分の考えを通そうとするあまり、友だちの考えを受け入れることを苦手とする児童が多いことも課題として上ってきた。そこで、本校の児童の実態を鑑み、学級活動を通して児童に折り合いをつけることを身につけてほしい、学校から発信できて保護者と一体となって学校を変えていく研修は何かという議論から、平成29年度より特別活動の研究を進めていく運びとなった。

（２）研究主題設定理由

主題の意味はかなり大きくとらえることができる。そして、主題の先には「学校教育目標」や「教師の願い」がある。また主題を達成するためには、本校の「児童の実態」を踏まえた研究をしなければならない。そこで漠然とした研究とならないように、副題に示した学級活動の充実を中心として、学級会の進め方にしぼって研究を進めることにした。

そこで、児童の主体性や自己肯定感を引き出すことや、児童同士の豊かな人間関係を築くことが必要不可欠であると考え、「自らの意見を持ち、自信を持って相手に伝えられること」、「相手の気持ちを考え、発表できること」を目指した話し合い活動が必要になってきた。そこで、児童自ら人との関わり方を学ぶための特別活動（学級会）の学校研究に取り組むことにした。よって、児童自ら取り組む活動を推進し、目指す児童像を実現するため、研究主題を「よりよい学級・学校生活づくりに主体的に参画する児童の育成」副題を「児童の主体性、自治的能力を育成し、自己肯定感を高める学級活動の実践」と設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 目指す児童像に迫る各ブロックの目標

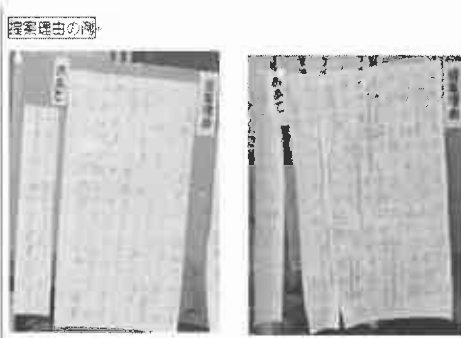
目指す児童像	よりよい生活の実現に向け、実践できる子	よりよい集団活動にするために、友達と考えや思いを伝え合える子	なかまを大切にし、意欲的に活動する子
低学年	友だちの意見を知り、わかり合うことができる。	自分の意見を持ち、発表することができる。	みんなとなかよく助け合って活動することができる。
中学年	話をしている人を見て、自分の考えと比べながら聞くことができる。	理由を明確にして意見を言ったり、異なる考えについてもよく聞いて公平に判断したりして、よりよい結論をまとめる。	決定したことを協力し合って進んで実践する。
高学年	友だちの考えを理解し、共通点や相違点を考えながら聞くことができる。	よりよい学校・学級生活をめざし、友だちの考えから自分の考えを深め、建設的に行動できる。	互いに信頼し、支え合いながらめあてに向かって進んで活動することができる。

(2) 研究の視点とテーマに迫るための手立て

互いに高め合う話し合い 【指導の工夫】	主体的に活動できる環境 【環境整備】	よりよい学級生活づくり の実践の評価 【工夫・改善】
①年度当初の 学級経営方針 「黄金の三日間」 ②計画委員会の指導 (事前指導、活動計画) ③提案理由の練り上げ ④時間内の合意形成 (決め方、司会の言葉、 進め方のパターン) ⑤適切な支援・助言 (学級会ノートの朱書き・ 先生の話の観点を明記) ⑥話し合いの可視化 (板書計画・学級会コー ナーのスタンダードの 作成)	①学級会グッズの活用 ②学級会コーナー、係コ ーナーの充実(今までの 話し合い、今後の話し合 いが分かるもの。係カ ードのレイアウトやネ ーミングの工夫) ③活動時間の確保(係、 計画委員、ふれあい、 児童集会) ④学級会ファイル(学級 会の手引き、学級会ノ ート感想、提案カード、 資料等を保存)	①評価者 ・・・自己評価、教師による 評価、相互評価 ②評価の場(対象) ・・・事前活動(計画委員 ・・・話し合い、(個々の児童、 計画委員、学級集団) ・・・実践(個々の児童、役 割の担当者、様々な集 団) ③評価方法 ・・・提案カード、学級会ノ ート、活動の観察、ふり 返しカード感想等 ④評価の蓄積 ・・・学級会ノート、ふり返 りカード ⑤先生の話の充実 ⑥学級のあゆみ

3 実践事例

(1) 学級会ハンドブック



「話し合うこと」
話し合うことの内容(例)
①何をするか
②どのようにするか
③役割分担はどうするか

「話し合いのあて」
→提案理由を具体化し、明確にする。

「決まっていること」を確認する。
決まっていることの内容

○学級会
①事前の指導

○学級会当日の朝の会で、学級活動コーナーに貼った短冊(意見)について説明させ、給食の時間に短冊の意見について話強にし、問題意識を高めておく。

○学級会前の休み時間に、黒板等への掲示などの準備をする。

- ・議題
- ・提案理由
- ・決めて
- ・決まっていること、プログラム、準備日程などの資料
- ・話し合うこと①～③
- ・意見の短冊(事前に出ているもの)
- ・時計の表示
- ・話し合いの段階表示「出し合う」「受け合う」「まとめる」
- ・役割の表示【係】 首からさげる席札 ※教師もつける場合もある。
- 【中へ差】机上に置く

○話し合ってから決める場合の短冊の作りかたを示す。

○話し合ってから決定する場合で、少数意見を尊重する観点から反対意見や賛成の少ない意見(項目)に対して「〇〇さん、どうですか?」と司会が確認する。

○黒板記録は、司会等と相談しながら記録の構造化を工夫し、「決定マーク」や「ありがとうマーク」「注目マーク」などを効果的に活用できるようにする。

○話し合うことは、議題や話し合いの見直しから「どんな役割が必要か」「役割を担えよう」とし、進め方は職能化を図るなど工夫できるようにする。

このように、場面毎に区切ったハンドブックを作成し、教師一人一人に配布し、発表当日も参加者の皆様に配布を行った。

(2) 場面ごとに分けた司会原稿

話し合いの進め方 (いくつかにきめる) <中>①

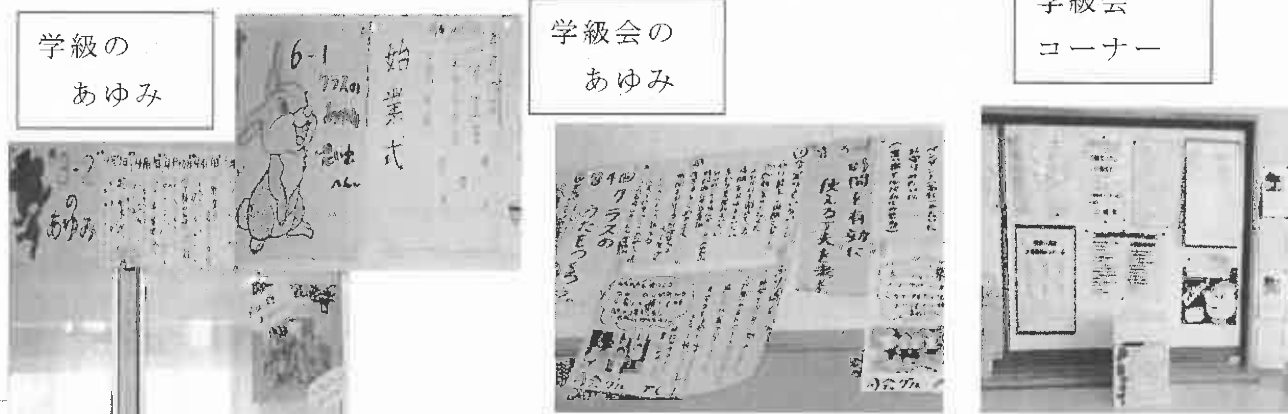
役わり	話し合いのじゅんじょ	進め方
司会	1 始めの言葉	◎起立！これから、第〇回学級会を、始めます。礼！
司会	2 歌	◎〇〇〇(クラスの歌)を元気に歌いましょう。(あわったら)着席！ ※司会グループは立ったままです。
司会グループ	◎司会グループのじこしょうかい	◎今日のし会の〇〇です。めあては～です。

話し合い活動の進め方 (いくつかに決める) <中>③

役割	話し合いのじゅんじょ	進め方
司会	◎話し合い	◎話し合いに入ります。始めに、話し合うこと①の口口について意見を 出してください。 ※【出し合う】の表示を出す。 (意見をたくさん出してもらおう。意見がなくなったら次に進む。)
		◎今出た意見について、質問はありますか。
		◎それぞれの意見について、さんせい意見、反対意見を 発表してください。
		【いくつかに決める話し合い】 ヒントカードを参考に進める。



(3) 掲示物の共通理解



4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ①学級会の進め方や準備の仕方を全体で共通理解することができた。
- ②話し合うための下地作りができ、教員の経験年数が浅くても、各クラスで充実した話し合い活動ができるようになってきた。
- ③児童の学級会や実践活動に対する意欲が向上し、よりよい学級生活づくりのための話し合い活動を繰り返し広げることができた。
- ④提案理由やめあてに沿った意見だけでなく、友だちの意見と比較した意見を出すことができるようになった。
- ⑤他教科でも、友だちの意見を生かした話し合いが行われ、対話的な学習の場面がよく見られるようになってきた。

(2) 課題

- ①積極的に意見を発表する児童に偏りが見られたり、意見をはきはきと発表することを苦手とする児童がみられたりし、自己肯定感を向上させる手立ての構築が必要である。
- ②今後は、今後は、学級活動(2)や(3)を含めた研究を深めていき、児童の自治的能力のみならず、自己指導能力や自己実現を図る力も伸ばすことが欠かせないのではないかと考えられる。それが、児童のさらなる自主性・自己肯定感を導き、自らの手で未来をつくる児童の育成につながれると考えられる。

研究主題

「自ら学び続ける児童の育成 ～できる喜びを感じる指導の研究～」

川越市立南古谷小学校

研究のポイント

- 「学びに向かう力」を育て、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」を身に付けさせていく児童の育成
- 授業研究、学習環境の整備、家庭との連携、学級経営の充実
- 児童にできる喜びを味わわせるための指導過程や指導方法の工夫
- よい人間関係を醸成するための互いのよさを認め合い、磨き合う活動の充実

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本校は、児童数1,074名、学級数は35学級（特別支援学級を含む）今年度一四七年目を迎えた大規模校である。「かしこく ゆたかに たくましく」を学校教育目標として、めざす学校像を「地域とともに生きる信頼される学校」としている。また、「5つの自慢」として①あいさつ ②ことば ③なかよし ④読書 ⑤歌声 を掲げ、日々教育活動に取り組んでいる。

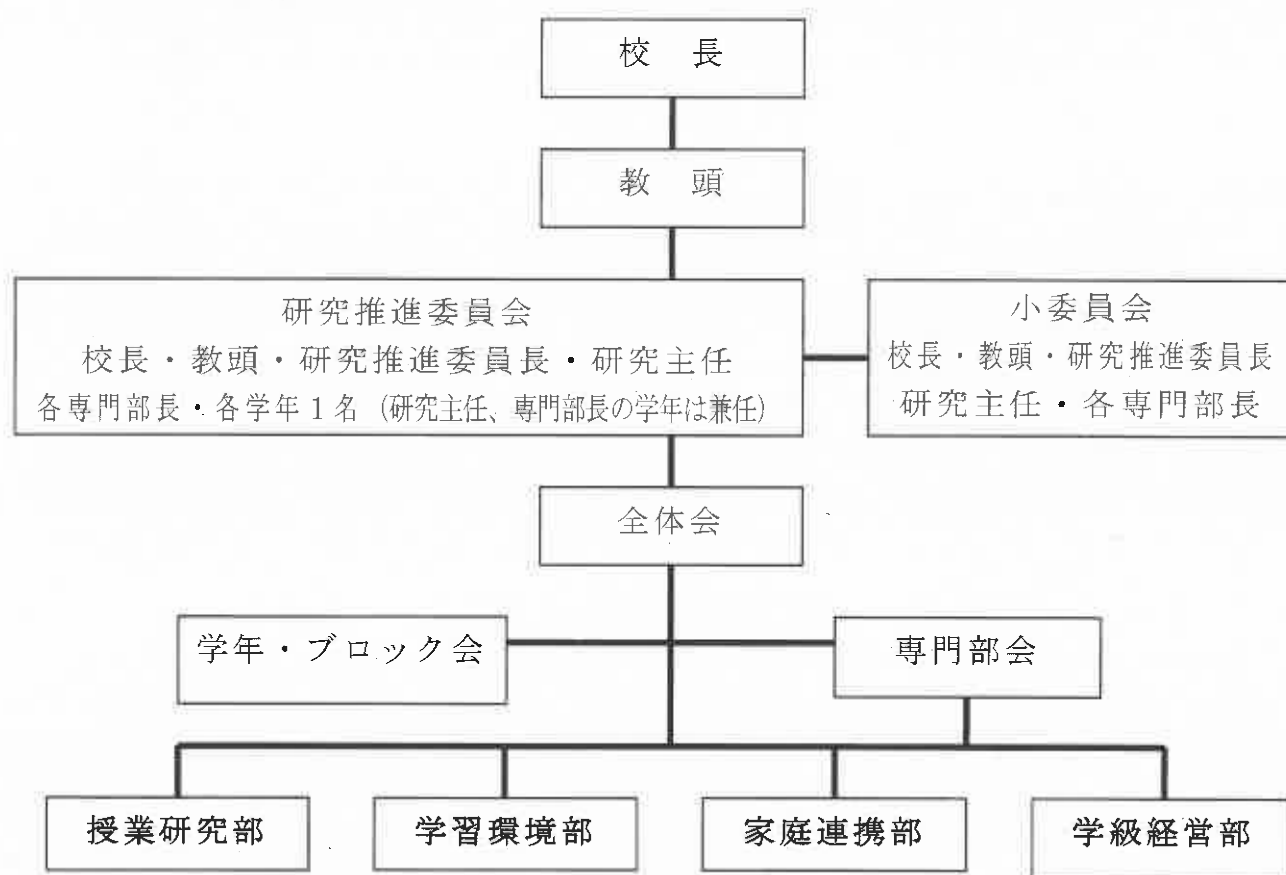
本校の児童は、素直で明るく、集団行動も協力してできる。学習面においても意欲的に取り組むことができる。一方で、授業での学習内容の定着や表現力・思考力に課題のある児童が少なくない。児童の実態を踏まえ、保護者アンケートや教職員の協議を経て、本校では、主題を「自ら学び続ける児童の育成」副題を「できる喜びを感じる指導の研究」とし、国語科・算数科教育を中心に研究を進めることにした。

(2) 研究主題設定の理由

将来の予測が難しい社会においては、自ら課題を発見し、未知の状況にも対応できる力が求められる。不断に学び続けることで、自らの学力を高め、人間性を豊かにすることは、将来の選択の幅の広がりにもつながる。そのために必要な資質や能力である「学びに向かう力、人間性の涵養」「知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力の育成」に向けても、本研究は大いに資するものと考えられる。

ただ、「主体的な学び」といっても学び方が日々の授業の中で身に付いていかなければ、その実現は難しい。すなわち、前提として教師の授業力の向上が不可欠である。本研究を通して、若手からベテランまでの教師が学力向上の方策を共有し、全クラスで一定レベル以上の授業が展開されなければならない。授業を通して、児童が日々「できる喜び」を感じることで学びの主体性の育成に結びつけていきたい。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究の仮説

仮説①『基礎的・基本的な内容や既習事項をおさえ、それらをもとに考える指導過程を繰り返していけば、課題解決力が育成されるだろう。』

手立て 課題解決的な授業…国語科・算数科の基本的な指導過程と指導の工夫

仮説②『基礎基本の定着と学ぶ喜びを感じることで、学習意欲も向上するだろう。』

手立て 基礎基本を定着させる学習環境…授業以外の学習形態と内容の工夫

仮説③『互いに助け合う人間関係を構築すれば、自信を持ち、学習意欲も向上するだろう。』

手立て 磨き合い支え合う人間関係づくり…学級経営・人間関係づくりの工夫

仮説④『学校での学びをもとに家庭と連携し、学習習慣を身に付ければ、学習内容の定着が図れるだろう。』

手立て 学びの定着と発展…家庭学習・家庭との連携の内容と方法の工夫

(2) 各研究部の取組

①授業研究部

国語科・算数科の基本的な指導過程と指導の工夫の提案や学力分析を通して学力に関わる実態を共有し、学力向上の手立てを提案したり、全職員が一定レベル以上の課題解決型授業ができるようにしたりすることを目的として活動している。

- ア 学力調査チーム
(入間地区学力調査・南小漢字検定)
- イ 指導過程確立チーム
(ぴかいちノート【右図】・指導過程の掲示物の作成)
- ウ 学習整備チーム



②学習環境部

学習環境の整備、朝学習や昼休みの時間を利用した学習計画の企画・立案を行い、基礎基本の定着と学習意欲の向上を図ることを目的として活動している。

- ア チャレンジタイム・まなびタイムチーム (朝学習や昼休みを利用した学習)
- イ 児童作品チーム
(南小俳句大賞【右図】)
- ウ 掲示環境チーム
(チャレンジコーナー)
- エ まなびコーナーチーム



③家庭連携部

家庭学習の仕方を見童に学ばせたり、保護者に家庭学習の重要性を知ってもらったりすることを目的として活動している。

- ア まなび通信チーム
- イ 調査チーム
- ウ 暗唱名人チーム【右図】
- エ 読書活動推進チーム
- オ 宿題のススメチーム



④学級経営部

磨き合い、支え合う人間関係づくりをキーワードに学級経営・人間関係づくりの工夫を目的として活動している。

ア たからものカード【右図】

イ きらり賞

ウ あいさつ運動【下図】



3. 研究の成果(○)と課題(●)

- 職員全体でスタンダードとなる型を意識して、授業に取り組むことができた。本校のような大規模校には効果がある。また、学年が変わっても同じように授業に取り組めることは児童にとっても大きい。
- 「ぴかいちノート」を活用して授業の進め方・板書・ノートの書き方を統一したことによって児童が安心して学習に臨めていることが着実に学習効果の高まりへとつながっている。
- 「暗唱名人」では、学年ごとに今学期中に暗唱する課題を設定することで、児童が目標をもって取り組むことができ、自分の言葉できちんと伝えられる力が育まれ、授業中の発言や発表にも生かされている。
- 異学年交流の「まなびタイム」では、低学年の児童は上級生に教えてもらうことで意欲的に学ぶことができている。普段あまり関わることのない異学年の児童同士が関わりを持つことで、コミュニケーション能力の向上や深い学びの実現となっている。
- 様々な取組をこつこつと積み上げてきたことで児童の力が伸び、学力の向上が着実に図られている。
- 家庭が学習に対して関心を持つようになった。
- これから求められている児童に身に付けさせたい力が何かを、研究を通して学ぶことができた。
- 自分の考えをまとめたり、発表したりする力をさらに高めたい。また話し合いを通して比較したり分析したりする力をつけていきたい。
- 授業以外での取組の精査を図り、内容を高め、自ら学び続ける児童の育成を図っていきたい。

研究主題

「心豊かで思いやりのある児童の育成」

～自己の生き方について考えを深めるための道徳教育の推進～

川越市立牛子小学校

研究のポイント

- 道徳的課題を児童一人一人に自分自身の課題としてとらえ考えさせる。
- 議論する場を設定し、多様な考え方にふれ、自分の考えを深めさせる。
- 家庭・地域に情報を発信し、家庭・地域を巻き込んで道徳授業を推進する。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

価値観の多様化や変化の激しい今日の社会で、児童一人一人がたくましく生き抜いていくためには、目の前で起きていることを自分のこととしてとらえ、解決していく力が求められる。そのためには他者と協力することが重要である。他者と協力するためには他者を理解するとともに、自分の考えを相手に伝える力も必要となる。

また、自分自身が相手を思いやること、目の前のことに感動したり、感情表現が豊かであったりすることが重要であると考えた。そこで道徳の資料における場面と実生活での場面を関連付け、「自分だったら…」と自分の生き方について深く考えさせることや友達の多様な考えを知ることで新しい考え方に気が付き、よりよい解決方法を導いていくなど道徳科の授業を通して児童に生きる力を身に付けさせることができると考えた。

さらに、いじめ未然防止のために、道徳的諸価値の理解を基に考え・議論し、自己の生き方について考える道徳が必要である。

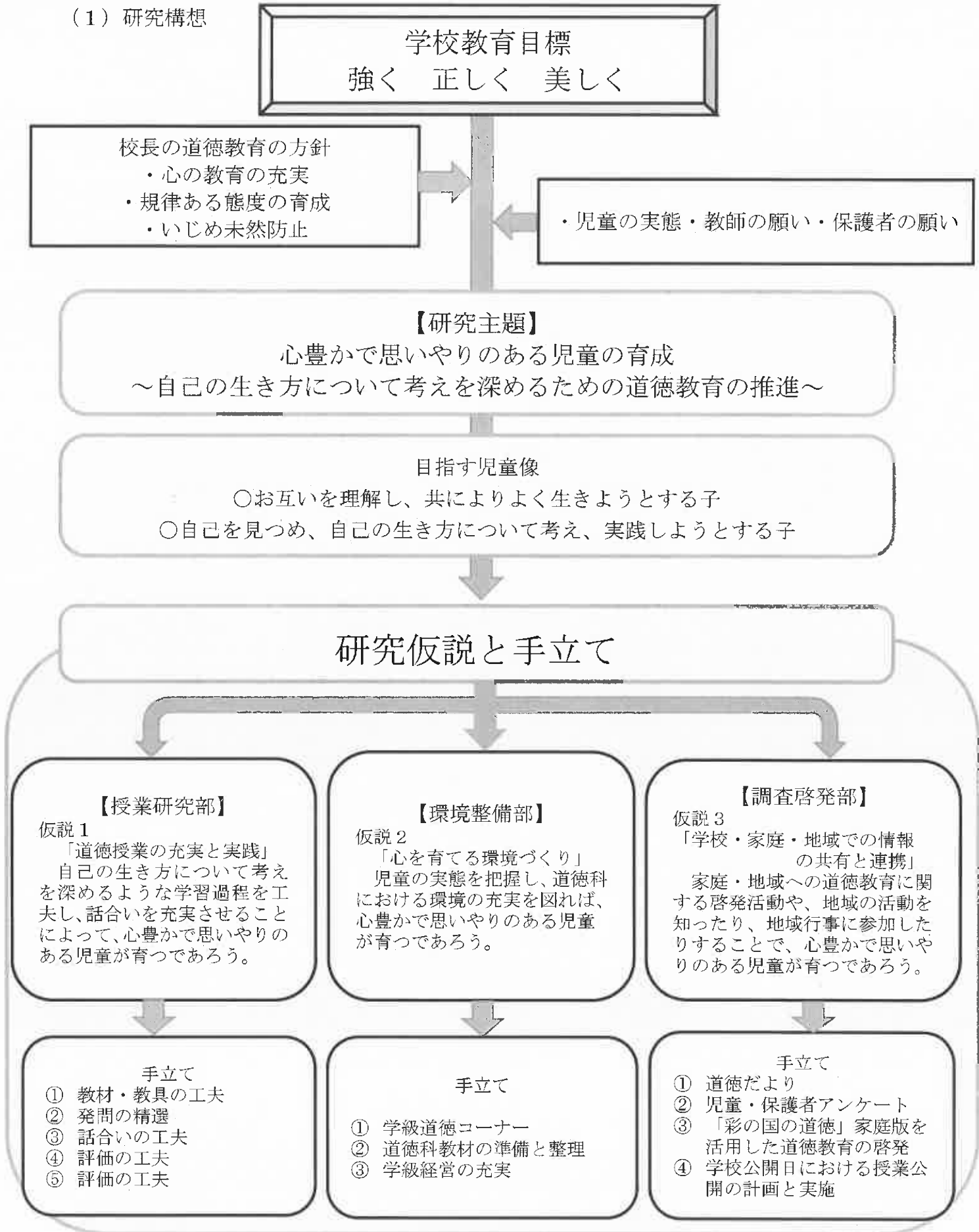
そこで、学校教育目標の具現化のため、本校の児童の実態、教師の願い、保護者の願いを明らかにし、「特別の教科 道徳」の実践を通して、児童一人一人が問題解決のため道徳的価値の理解を基に、自己を見つめ物事を多面的、多角的に考え、自己の生き方についての考えを深めていけるように、全職員が一体となって授業の進め方、環境整備等について研究し道徳教育を充実していくことをねらいとする。

(2) 研究組織



2 研究の内容

(1) 研究構想



3 実践事例

授業研究部の取組（一部抜粋）

(1) 取組のねらい

研究の仮説1、「自己の生き方について考えを深めるような学習過程を工夫し、話合いを充実させることによって、心豊かで思いやりのある児童が育つであろう。」にもとづき、話合いを中心とした授業の向上を図る。

(2) 取組の概要

① 教材・教具の工夫

【児童の学習意欲を高める導入】

低学年

- ・物語の世界観を深める絵や写真を掲示することで、学習への動機付けとなった。
- ・学校生活の中で、学習に合った場面の写真を子ども達に見せることで、学習課題を身近なものに感じることができた。



生活の場にあった写真

中学年

- ・範読前に登場人物や物語の設定を確認することで、児童が物語の粗筋を把握することができた。また、ホワイトボードを使うことで、黒板に登場人物の心情を大きく表すことができた。
- ・事前のアンケート結果を導入時に児童に知らせることで、ねらいとする価値への意識を高めることができた。



プロジェクターを用いた資料提示

高学年

- ・事前のアンケート結果、教材文、場面絵等をパワーポイントで示すことで、視覚に訴えることができ、より理解を深めることができた。



登場人物や場面の状況把握

【児童がねらいとする価値を深められる教具】

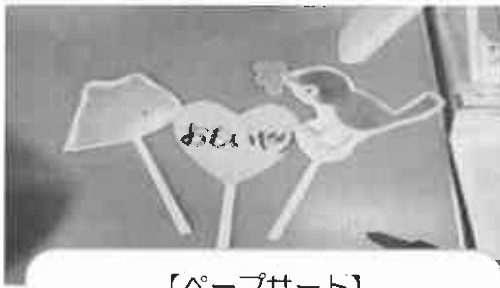


【プロジェクターの利用】
主人公の表情を拡大して心情理解を深める。全文の資料提示を行う。

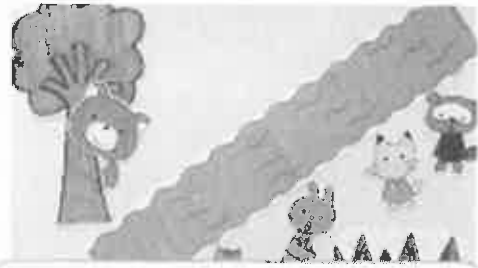


【役割演技】
動作化することで、物語の状況が理解できるようになる。

【紙芝居】
紙芝居で資料提示をすると、心情と場面の様子が理解しやすい。

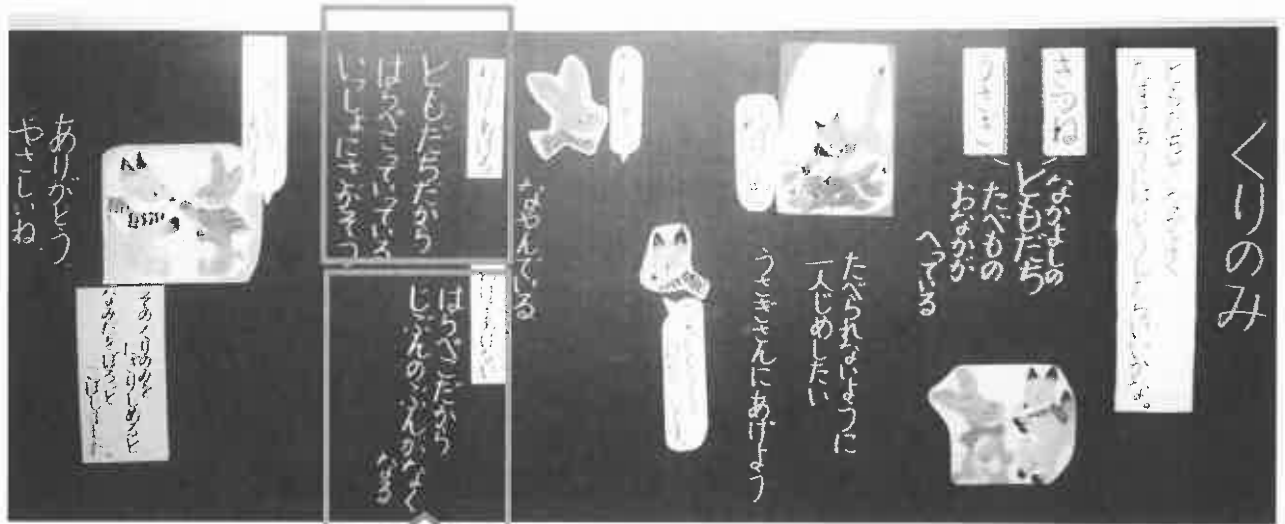


【ペープサート】
動きをつけながら考えさせることにより、児童を物語に引き付ける効果がある。



【パネルシアター】
登場人物に動きをつけることで、心情や場面の様子を理解しやすい。

【板書の工夫】（1年生 くりのみ）



□のように、考えを上下に対比させた板書

4 研究の成果と課題

<成果>

- 授業のスタンダードな学習指導過程について理解を深めることによって、確実に道徳科の学習指導が行えるようになった。また、児童も学習の仕方になれ、意欲的に授業に参加する姿が見られるようになった。
- 話し合いをする場面を焦点化し、発問を精選することで、児童が多面的・多角的に考えることができるようになった。
- 話し合いの方法を発達段階に応じて系統的に示したことで、自分なりの考えをもち、友だちとの話し合いを楽しんで行う姿が見られるようになった。
- 道徳ワークシートの振り返り項目を学校で統一して作成していくことで、自己を見つめ、自分の生き方を考える場を毎時間設けることができた。
- 道徳性を養うための環境を整えていくことで、自分の日常生活の具体的な場面での気づきにつながるようになった。

<課題>

- ▲道徳教育の要である道徳科の指導方法について、さらに研究を深め、牛子小の道徳教育を活性化していく必要がある。
- ▲各教科・特別活動・総合的な学習の時間と道徳科との関連性を追求し、年間指導計画に生かしていく。

研究主題

「自分の考えを持ち、表現できる児童の育成」
～児童も教師も算数の楽しさを味わおう～

川越市立高階南小学校

研究のポイント

- 算数の楽しさを味わえる児童の育成をめざす。
- ◇算数科における「楽しさ」の追求
- ◇算数科における「味わえる」ことの追求

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

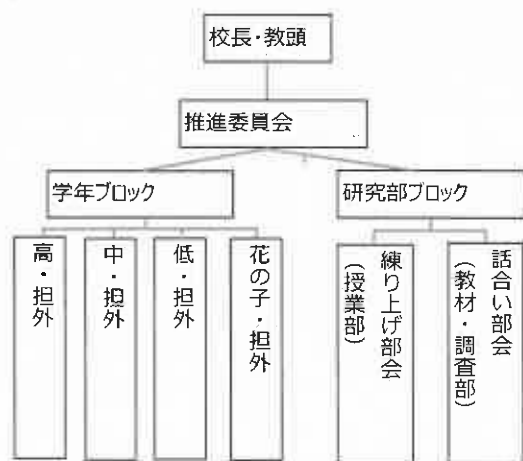
本校は川越市の南の果て、ふじみ野市に隣接し、住宅街の中に畑の散在する地区にある。2・3年生は3クラス他学年が2クラス並行の中規模校である。

算数科においては領域では「図形」、観点では「数学的な考え方」、問題形式別では「記述式」が弱いことが各種の調査によってわかってきた。そこで、学力の向上の取り組みが本校の課題の一つとなっている。また、学力の個人差もあり、指導や支援の方法の工夫改善が必要であると考えられる。そこで、指導方法を工夫改善し、一人一人が算数の楽しさを味わえることができるようにすることが研究のねらいである。

(2) 研究主題設定の理由

どの児童も、学習ができるようになりたいという願いを持っている。しかし、低学年からの積み重ねができていなかったり、理解不足があったりと、学力が相応に身につけていない児童は多くいる。それは、算数科において多く現れ、その学力の差も大きいことがある。しかし、児童はできるようになりたいのである。その願いに応えるには、我々が指導方法を工夫改善し、分かる児童を多く増やすことが肝要である。「分かる」喜び、「できる」喜びを感じ、身につけたことが「生活に活かす」ことができれば、算数科の学習が楽しくなり、ひいては、他の学習にも良い影響を与え、個人の学力の向上が図られると考え本研究主題を決定した。

(3) 研究組織



花の子を独立ブロックとした

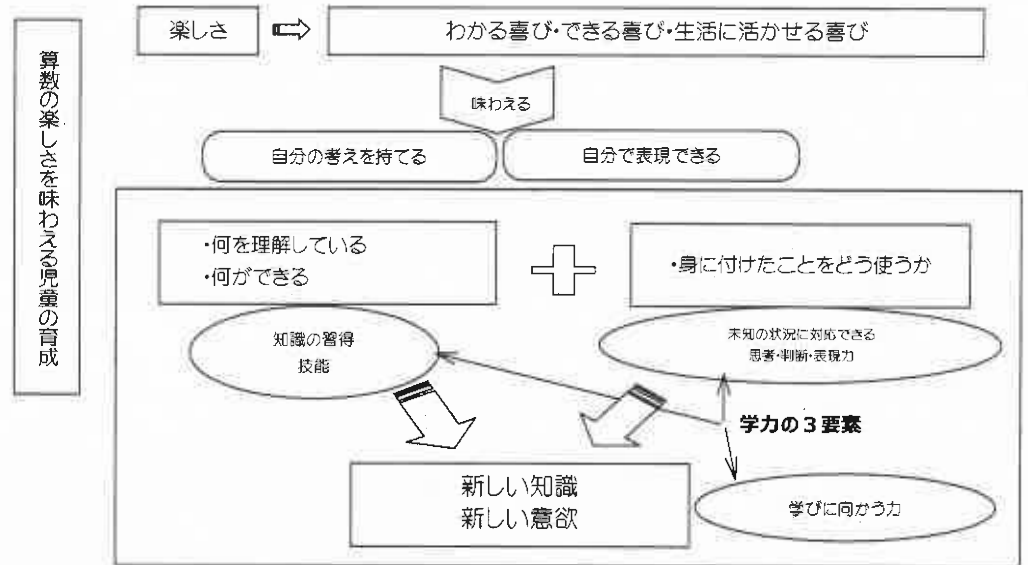
研究ブロックの変更

2 研究の内容

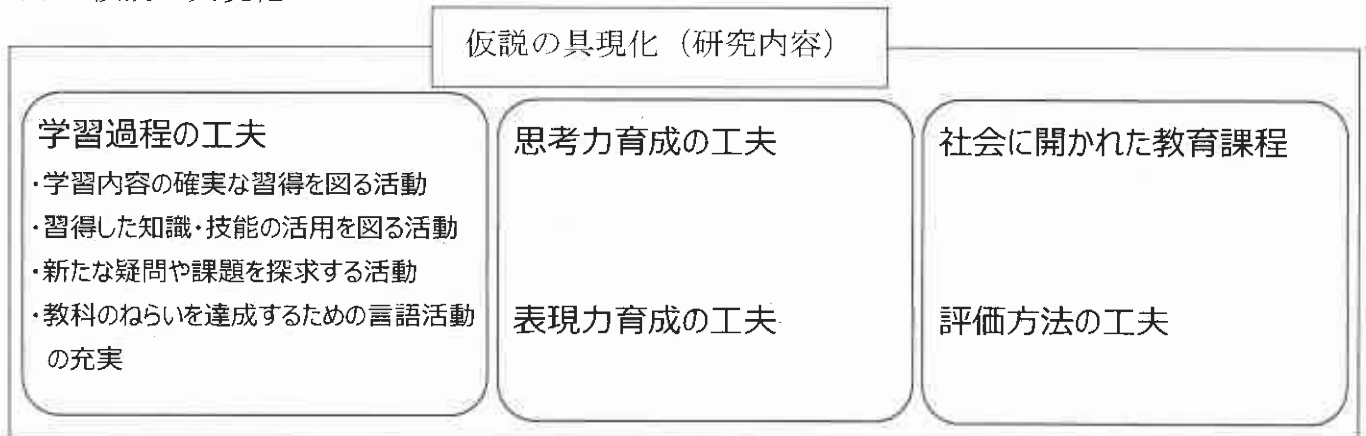
(1) 研究仮説

算数科における「楽しさ」とは「わかる喜び・できる喜び・生活に活かせる喜び」と捉え、学習過程の工夫や思考力育成の工夫、表現力育成の工夫を行えば、自分の考えが持て表現できるであろう。

(2) 研究の方向性



(3) 仮説の具現化



(4) 年次計画案

1 年次	2 年次
基盤づくり	深化・充実
<ul style="list-style-type: none"> ○テーマの策定 (研究主題、仮説) ○研究体制の確立 ○授業実践 ○次年度重点の明確化 	<ul style="list-style-type: none"> ○新テーマの確定 ○授業協力者を招いた授業実践 ○実践の積み上げ ○研究のまとめ ◎実践発表会開催による外部評価
<ul style="list-style-type: none"> ○仮説や視点の理解 ○成果と課題の共有 	<ul style="list-style-type: none"> ○研究の重点確認 ○成果と課題の共有

(5) 具体的取組

□学習方法の一般化

高階南小のスタンダード

①導入でその学習を考える元となる「足場」を作り、全員が同じ土俵に立てるようにする。

②「問題→課題→作戦→実行→まとめ→練習→ふり返り」を1時間の学習の流れとする。

板書、ノートを同じようにする。

◎授業の流れが定着し、見通しを持って授業に臨むことができるようになっている。

◎自分の考え方をノートに書くことができる児童が多い。

△どうしてもその考え方なのかを友達やみんなに伝えることができる児童は少ない。

→せっかく自分で考えられたことを、上手に表現できない！

自分の考えを表現できる児童を育てられるような授業の工夫が必要である。

新たに加えたい高階南小スタンダード

□「話し合いの仕方」を作り、自分の考え方を伝えられるように指導していく。

☆意欲的に自分の意見を伝えたいくなるような・・・

○話し合いの話型

○話し合いの人数・隊形

○聞く人の態度

□全体での「練り上げ」の基本の行い方を作成する。

☆クラス全体が練り上げに参加できるようにしたい。

○練り上げの基本の流れのパターン化

○問題解決の練り上げでは、その時間につけさせたい考え方について全員に考えさせることが大切

↓
「一部の児童で行われている」と言われないうために「今日考えるべきことを、全員が考える授業」を行う

3 実践事例

第2学年2組 算数科学習指導案

授業者 児玉陽一朗

1 単元名 4けたの数 1000より大きい数をしらべよう

2 単元について ー省略ー

3 研究テーマとの関わり

自分の考えを持ち、表現できる児童の育成

～児童も教師も算数の楽しさを味わおう～

(1) 基礎的・基本的な知識・技能の定着と足場（今回の内容につながる既習事項）を大切に
した思考のプロセス

「算数スキルタイム」

…業前の時間にプリントやドリル学習を行う。

「導入における足場づくり」

…授業始めの数分間で今回の内容につながる既習事項の確認問題に取り組む。

「形成プリント並びに計算ドリルの活用」

…この3つの活動を通して、基礎的・基本的な知識や・技能を定着させると共に、学習している単元につながる既習事項を確認し、一人一人の自力解決につなげる。

(2) 問題解決的な学習過程

○つかむ	①足場づくり ②問題を知る ③課題をつかむ ④見通す	・今回の内容つながる既習事項を確認する。 ・前時との違いに気付かせ、課題につなげる。 ・児童の言葉で。 ・既習の知識を使う求め方の見通しをもたせる。
------	-------------------------------------	---

○解決する	⑤自力解決をする	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを持たせる。 ・個に応じた支援をする。
○検討する	⑥練り上げる	<ul style="list-style-type: none"> ・ペア学習や小集団学習による対話的な学びを取り入れる。 ・練り上げの視点にそって話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> (1) 良いところを認める。 (2) 似たところを見つける。 (3) いつでも使えるようにする。
○まとめる	⑦学習のまとめをする ⑧適用問題を解く ⑨学習を振り返る	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の言葉でまとめさせる。 ・本時の学習の考え方が理解されているか確認する。 ・本時の学習を振り返り、興味・関心を評価する。

毎時間同じような学習過程で授業することで、問題に対する思考の流れを定着させていく。算数を苦手とする児童も見通しをもって問題に取り組むことができる。

(3) 学習過程の確立

「ノート書き方」 …学習過程に合わせた型を示し、思考の流れを定着させていく。

「発表の仕方」 …子どもから出た意見を取り上げ、価値付けることから、自由な話し合いの中で、論理的な話し合いをできるようにさせていく。

「学習コーナー設置」 …既習事項を基に自力解決に臨めるよう、精選して掲示する。

— 後 略 —

4 成果と課題

(1) 成果

- ・校内で行った事前検討会では、授業者が模擬授業を行う形で進めた。参加者は事前に指導案を読み、クラスに必ずいるであろう児童になりきって臨めた。
- ・経験の豊かな教諭は自分のスキルを示し、若い教諭は挑戦魂を投げかけ、授業者を参加者全員の考えや思いを出し合い議論が白熱する場面も見られた。決して険悪な雰囲気ではなく、「なんだかみんなで学べたなあ」と思える時間を共有することができた。
- ・検討会の回数を多く持つことで、論点を絞った話し合いになり、改善された流れを更に検討することができた。
- ・2回目以降の検討会から、他校の先生方が参加することにより、凝り固まった思考に、新鮮な感覚の思考を注ぎ込んでもらうことができた。
- ・検討会を全員で行うことで、自分たちの授業として共に研究をしているという感覚を共有することができた。
- ・この数回の検討会は他校の先生も含めて、今までの検討会にはない、活発に話し合うことで様々な考えに触れることができるなど、「学んだな」と実感できる有意義な時間であった。

(2) 課題

- ・算数教育のねらいである「創造性の基礎を培う」ために、より思考力を育む取組に向かうことが必要である。そのために、
 - ①授業中は児童の反応を見逃さぬように、また、児童の反応を楽しみながら展開できるようにしていく。
 - ②多面的にもものを見る力を付けさせていく。
 - ③理論的に考える力を付けさせていく。そのために
 - ア) 根拠を持って考えさせる
 - イ) 筋道を立てて考えさせる
 - ウ) 理論的に考えさせる
- という、思考回路を構築することができる授業を積み重ねていく。

研究主題

「互いを高め合い認め合うことのできる児童生徒の育成

～小中9年間の学びと育ちの連続性を重視した教育—『道徳教育』を中心に～

川越市立福原小・中学校

研究のポイント

- 小中一貫教育に向け、共通の学校研究課題を設定し、9年間の連続性を重視した具体的な取組の実践
- 二分法等を用いた議論する道徳授業の展開と自他の考えを高め合い認め合う指導の工夫
- 小中合同の研究組織の構築と道徳の協働授業の実践

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

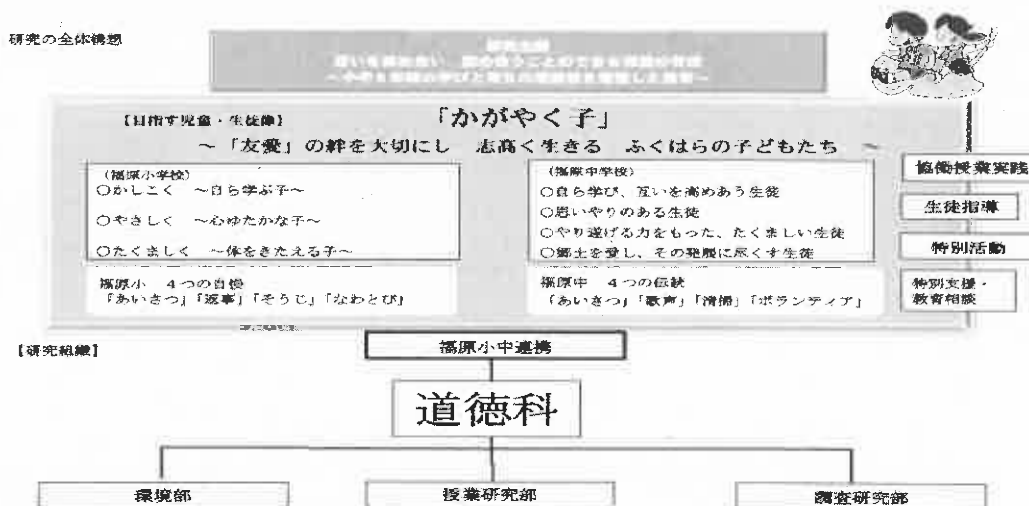
福原小学校の児童のほとんどは福原中学校へ進学することから、抱える学校教育課題は、共通している面が多い。そこで、これまで培った小中連携の基盤をもとに、今までの取組を検証することで、「小中一貫教育」に向けて、さらに歩みを進める。

本研究では、小中学校共通の目指す児童像・生徒像である「かがやく子」の具現化に向けて、9年間を通して豊かな心を身に付けていくために「特別の教科 道徳」の研究に取り組む。具体的には、小中共通の授業の進め方（福原スタンダード）や議論する活動、視覚的な教材の工夫などに小中合同の研究組織で取り組んでいきたい。

(2) 研究主題設定理由

福原地区では、古くからの歴史があり、小学校、中学校ともにおらが村の「福原学校」として地元の期待が大きい。そこで、地域に根ざした愛される学校像を小中学校が共有し、教職員が連携して、より豊かな人間性を目指す一貫した教育活動を行う必要があると考え、研究主題「自ら学び、互いを高め合うことのできる児童・生徒の育成 ～小中9年間の学びと育ちの連続性を重視した教育—『道徳教育』を中心に～」を設定した。

(3) 研究の全体構想及び研究組織



2 研究の内容

(1) 仮説と手立て

〈仮説1〉二分法等を使い議論する道徳科の授業を行っていけば、一人一人が進んで自分の考えを発表し、より考えを深めることができるであろう。

〈手立て〉 ・共通で使える略案の型 ・ワークシートの作成
・二分法の活用 ・発問（切り返し）の工夫

〈仮説2〉視覚的に役立つ教材を取り入れることで、より効果的に友達に考えを伝えたり、友達の考えを認めたりすることができるであろう。

〈手立て〉 ・表情カード ・4つの価値
・Nシート ・友愛の木（小学校）、永遠の星（中学校）

〈仮説3〉小中学校が連携して児童・生徒の実態に応じた取組を行っていけば、9年間継続して道徳的実践力を高めることができるであろう。

〈手立て〉 ・小中学校の協働授業 ・協働事業
・アンケートの実施

3 実践事例

(1) 授業研究部

① 児童一人一人が進んで自分の意見を発表し、考えを深める指導の工夫

- ・指導案形式の統一（福原スタンダード）
- ・授業の進め方の工夫
- ・導入の工夫（短く、課題の提示等）
- ・話合いの進め方の工夫
（二分法ヒント集、時間配分）
- ・効果的な終末の工夫

立場の分け方の例(小3は帽子、中1は名札)

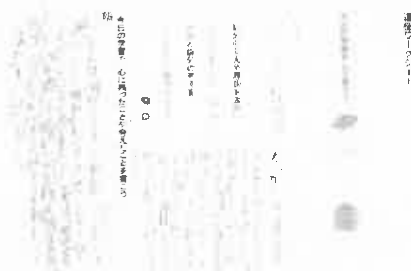


二分法の授業の流れ（福原スタンダード）

- ① 導入 価値について触れる
- ② 状況の説明
- ③ 資料渡し
- ④ 第1発問
- ⑤ 中心発問（二分法）
 - ・2つの立場に分ける
 - ・それぞれの理由を聞く
 - ・グループで理由を吟味する
 - ・全体で理由を吟味する
 - ・本質に迫る発問
- ⑥ 価値について改めて考える発問
- ⑦ 教師の説話
- ⑧ 本時の振り返りをワークシートに書く

② 児童生徒の道徳的実践力を高める学習活動の工夫

- ・ワークシートの活用



③ 協働授業

- ・教材名「ブランコ乗りとピエロ」
(小学校6年)

T 1 小学校教諭と T 2 に中学校教諭

- ・ T 1 (小) …授業を主に進める
- ・ T 2 (中) …〇〇の立場に立って考えを述べる。説話を行う。

- ・教材名「銀色のシャープペンシル」
(中学校1年)

T 1 中学校教諭と T 2 に小学校6年時の担任

- ・ T 1 (中) …授業を主に進める。
- ・ T 2 (小) …T 1 と同様に授業を進め、効果的な切り返しを行う。

中学校教諭

小学校教諭



中学校教諭

小学校教諭

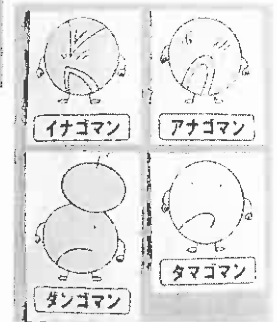
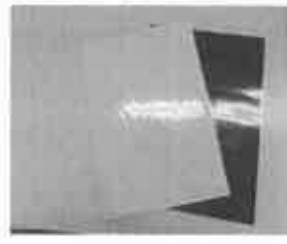
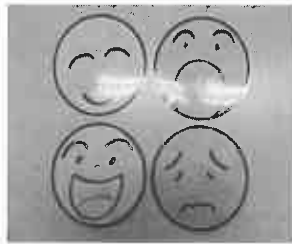
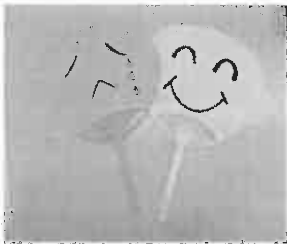
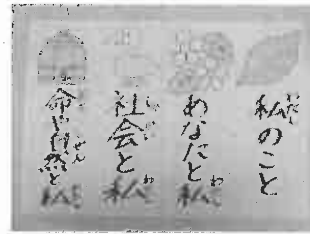


(2) 環境部 (授業に活かせるユニバーサルデザイン・校内環境の整備等)

児童が自ら考えを伝えたり、友達の考えを知ったりすることができる教材・教具の工夫

① 授業に活かせるユニバーサルデザイン

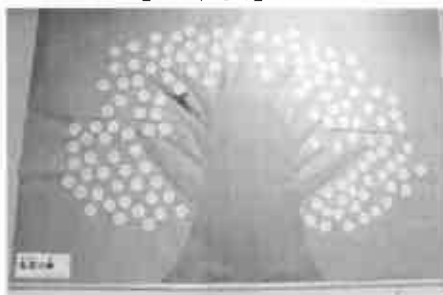
- ・表情カード、心情円盤、感情うちわ
- ・4つの価値 (黒板掲示用)
- ・Nシート (子どもの考えを記入)



② 校内環境の整備等

- ・各教室・廊下掲示・学年掲示板の工夫、道徳コーナーの設置

【小学校】



「友愛の木」

自分や友達、他学年のよいところ

【中学校】

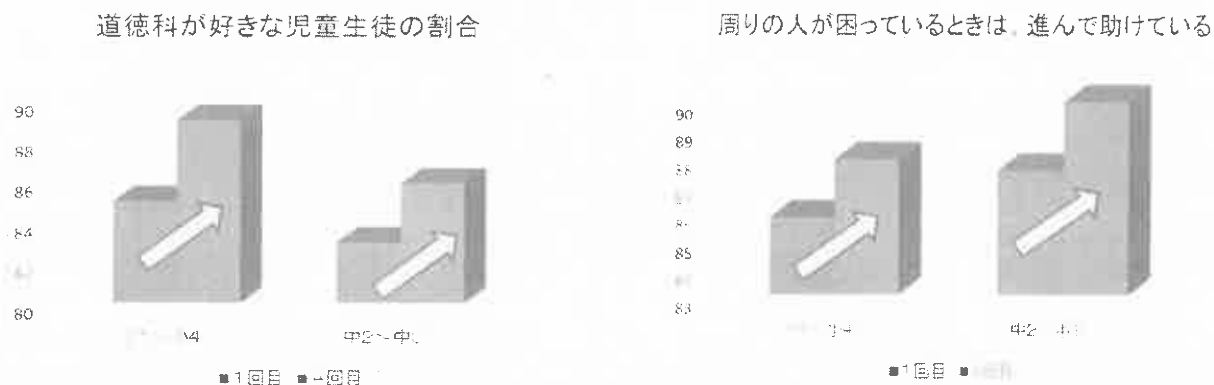


「永遠の星～Eternal star～」

生徒会中心のいじめ撲滅運動

(3) 連携・調査部（児童生徒の実態把握、成果の検証等）

アンケートの結果



日常生活の中で互いに助け合う心が育ってきていることがわかる。特に中2～中3の数値が向上し、9年間の継続した取組の成果が見られる。

小学校低・中学年及び中学校2・3年で好きな児童・生徒の割合が増えている。道徳科スタンダードの取組の成果と考える。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・二分法を取り入れてグループや学級全体での話し合い活動を行い、考え議論する道徳科の授業を行うことにより、児童・生徒は自分の考えを深めることができるようになってきた。
- ・心情円盤などの視覚的に役立つ道徳グッズを活用することで、自分の考えを明確にしたり教師や友達にわかりやすく伝え合えたりすることができるようになってきた。
- ・道徳授業の【福原スタンダード】を確立していく中で様々な成果が見られた。例えば、授業形態や資料渡しを工夫することによって、児童・生徒がより授業に集中できるようになってきた。また、本質に迫る発問や終末を工夫したり、指導案へ切り返し等を明記したりすることによって、よりめあてに迫っていけるようになってきた。
- ・小中学校での指導案【福原スタンダード】の共通化を行うことや、小中学校双方で行う協働授業の内容を研究し深めていくことで、9年間を見通して道徳的実践力を高めることができるようになってきた。

(2) 課題

- ・ねらいとする道徳的価値に迫っていくための「切り返し」の技能の向上や「本質に迫る発問」を工夫していきたい。
- ・小中一貫教育を見据えて、9年間を①小1～小4、②小5～中1、③中2～中3の段階に分けて、それぞれの目指す児童・生徒像を設定し、研究に取り組んできた。道徳協働授業などに今後も取り組んでいくとともに、他教科に広げて、より効果的な取組となるよう、さらに研究を深めていく必要がある。

「地域と学校が一体となった開かれた学校づくり」

川越市立南古谷中学校

<研究のポイント>

- 学校運営支援者協議会制度を導入する。
- 学校教育目標を地域と共有し、地域人材を活用した授業や、地域と連携した活動を取り入れた教育課程を編成する。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

学校運営支援者協議会制度を導入するとともに、地域の人材や教育環境を活用した教育課程を編成し、目標を学校と地域が共有することで、地域と学校が一体となった開かれた学校づくりを推進し、地域とともに「気づき 考え 話し合い」とともに実行する「心豊かな生徒」をはぐくむ体制の確立を図る。

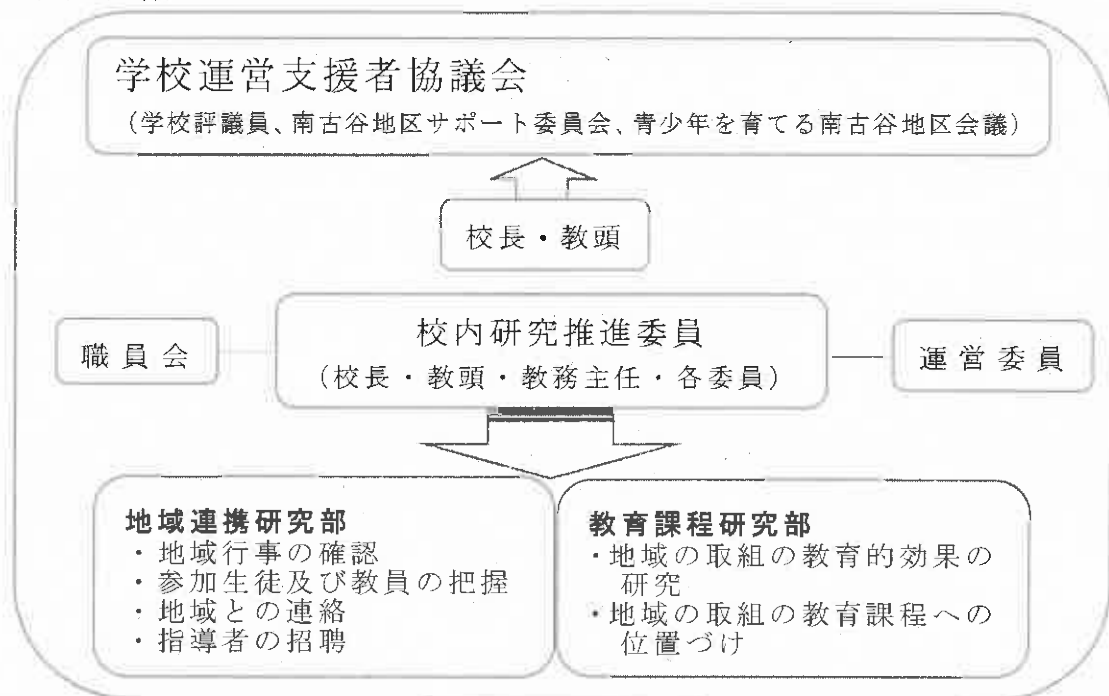
(2) 研究主題設定の理由

現代の子どもたちを取り巻く教育環境は、地域社会のつながりや支え合いの希薄化、家庭の孤立化など様々な課題に直面しているとともに、学校を巡る課題も複雑化・困難化している状況にある。学校においては、子どもの学びの場のみならず、地域コミュニティの核としての役割を果たすことが求められている。そのような中、次期学習指導要領において、「社会に開かれた教育課程」が掲げられ、学校教育を校内だけに閉じず、地域と学校が目標やビジョンを共有し、協働しながら子どもたちの豊かな成長を支え、「地域とともにある学校づくり」を進める事が重要であると示された。

本校は、今年で開校36年を迎えた川越市内の中でも比較的新しい学校ではあるが、南古谷地区旧来からの農村型自治活動が盛んに行われていた経緯もあり、多くの地域の団体等と連携した取組が数多くある。

そこで、本校の特色である地域との連携を通して、地域と学校が一体となった開かれた学校づくりを推進し、「気づき 考え 話し合い」とともに実行する心豊かな生徒」を地域とともに育てていきたいと考え、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容

(1) 学校運営支援者協議会制度の導入

- ・本校では、地域の自治会長、PTA顧問、民生児童委員等を構成員として学校評議員会を組織している。学校評議員会を中心とし、南古谷地区子どもサポート委員会や青少年健全育成連絡協議会会長等、さらには生徒代表を加えた学校運営支援者協議会を組織する。
- ・各学期1回、学校運営支援者協議会を開催し、学校運営方針、教育課程の進捗状況、生徒指導等について協議を行う。
- ・年度末に、学校評価の分析結果を踏まえ、次年度の学校運営方針について協議を行う。

(2) 地域の人材や教育環境を活用した教育課程の編成

- ・南古谷地区サポート委員会、青少年健全育成連絡協議会等が主催する様々な取組の教育的効果を明確にし、教育課程に位置づける。
- ・「総合的な学習の時間」で実施している農業体験や「ふれあいタイム」等の文化体験的学習に加え、その他の教科においても地域人材を講師として積極的に招聘する。

3 実践事例

(1) 各研究部の取組

① <地域連携研究部>

- 地域行事への参加や、地域人材の指導者への招聘を促進する。

② <教育課程研究部>

- 地域との取組の教育的効果について研究する。
- 地域との取組を教育課程に位置づける。

(2) 主な取組

①地域との取組の教育的効果について

本校は、学校教育目標として「気づき 考え 話し合い とともに実行する 心豊かな生徒」を掲げている。地域と学校が一体となった開かれた学校づくりを推進するためには、この学校教育目標を地域とともに共有し、その具現化に向けて連携・協力することが求められる。そこで、学校教育目標を以下のように具体的な身につけさせたい能力として示すことで、それぞれの取組における教育的効果を明確にし、その視点に基づいた連携・協力を図ることにより目標の具現化につなげていきたい。

南古谷中学校 学校教育目標

「気づき 考え 話し合い とともに実行する 心豊かな生徒」
＜身につけさせたい資質・能力＞
気づき・・・課題の発見、積極性、主体性
考え・・・思考力
話し合い・・・コミュニケーション力
ともに実行・・・課題解決力、協働
心豊か・・・道徳性、思いやり

研究の進め方であるが、教育課程研究部において、学校教育目標と生徒に身につけさせたい力との関係についての研究を進めた。

まずは、学校教育目標の文言である「気づき」については課題の発見や積極性、主体性が、「考え」については思考力が、「話し合い」についてはコミュニケーション力が、「ともに実行」については課題解決力や協働が、「心豊か」については道徳性や思いやりがそれぞれ該当するのではないかとの仮説を立てた。さらに、活動終了後に、生徒自らが、どのような力がついたのかを「振り返りカード」に回答させ、その分析結果を今回の研究に反映させることとした。

研究の結果、それぞれの取組からは上記のような教育的効果があることが明らかとなった。

このように、現在、南古谷中学校で実践されている地域と連携した取組には、多くの教育的効果を期待することができると考えられる。これらの取組を、学校と地域が一体となって推進していくことは、子どもたちの地域社会への関心を高めるとともに、将来的には、ここ南古谷地区自体の街づくりを担う人材の育成にもつながると考えられる。そのためにも、学校教育目標や様々な取組における教育的効果について学校と地域がより密接に情報を共有し、ともに理解を深めた上で連携を図ることが重要であると考える。

②教育課程への位置づけについて

上記のとおり、地域と連携した取組については、多くの教育的効果を認めることができた。そこで、次に、教育課程への位置づけについての研究を進めた。

具体的には、本校教育活動の領域に「地域との連携」の項目を設け、それぞれの取組への「参加形態」、「活動内容」、「教育課程の位置づけ」を明確に示した年間指導計画を作成することとした。

年間指導計画を作成するにあたり、それぞれの取組における実施時期、参加形態、評価方法について研究を進めた

実施時期については、例年の活動状況を基に、行事検討委員会を中心に研究を進めた。参加形態については、以前は委員会や部活動を中心としていたが、ボランティアによる参加の機会を増やし、生徒の主体性を高めていきたいと考える。評価については、参加した取組について、通知表及び要録等に所見として記述することとした。これは、参加した活動に対する記録を所見として記述することで、子どもたちに対し、地域との様々な取組が本校の教育活動の一環であることを意識させるとともに、自らの活動姿勢を振り返らせ、それぞれの経験を、よりよい学校生活につなげるためである。

そして、これらを踏まえ、それぞれの取組の特性等を考慮し、「総合的な学習の時間」と「特別活動」として教育課程に位置づけることとした。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- 学校運営支援者協議会において、学校評価に基づいた次年度の学校経営方針について協議を行えたことで、地域に対し、学校の目指す方向性の理解を深めることができた。
- 地域との取組における具体的な教育的効果について明確にすることで、生徒が主体的に活動に参加することができた。
- それぞれの取組における指導者からも、教育的効果を意識しながら生徒と接する事ができたため、指導者自身も意欲的に取り組めたとの感想をいただいた。

(2) 課題

- 教職員の負担軽減の視点からも、取組の重点化、縮小等に向けた協議が今後必要である。
- 「全国学力・学習状況調査」「埼玉県学力・学習状況調査」における質問紙調査の結果分析を行い、地域との取組における教育的効果についての検証を行う必要がある。
- 学校運営支援者協議会の在り方や構成員について、今後も検討を続けていく必要がある。さらに、学校教育目標や学校運営方針の共有についても、保護者やその他の地域の方々に、より理解を深めるための具体的な方策等の検討を続ける必要がある。

研究主題

「自身の健康に関心を持ち、望ましい生活習慣を身につけた児童の育成」

～自ら学び、実践する「歯・口の健康づくり」を通して～

学校名 川越市立川越第一小学校

研究のポイント

- 専門家を活用した授業研究
- 児童の実践力の向上をめざした指導の工夫

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本研究は、一般社団法人日本学校歯科医会による「生きる力をはぐくむ歯・口の健康づくり推進事業（2019・2020年度）」の委嘱を受けたことを機に、本校がこれまでに行ってきた歯科保健指導を整理・深化させ、児童に望ましい生活習慣を身につけさせることをねらいとして研究をスタートさせた。

これまでも授業や環境整備を通して児童の意識向上を図ってきたが、推進事業の3つの内容「むし歯や歯周病の予防方法の理解と実践（歯科保健）」「学校生活における歯・口のけがの防止と安全な環境づくり（安全教育）」「食べる機能や食べ方の発達支援を通じての実践的な歯・口の健康づくり（食育）」について改めて本校の指導内容を見直し、児童がより主体的に、自らの歯・口の健康について考えることができるように研究を進めた。

(2) 研究主題設定理由

本校の学校教育目標である「次代を担い、心豊かでたくましく生きる児童の育成」の具現化を目指し、研究主題を「自身の健康に関心を持ち、望ましい生活習慣を身につけた児童の育成」～自ら学び、実践する「歯・口の健康づくり」を通して～とした。

本校ではこれまで、学校歯科医、歯科衛生士等の協力を得ており、むし歯の治療率は大変高い状況にある。しかし、歯・口に関わるその他の健康や安全について必ずしも高い意識を持つものではなかった。そこで、むし歯の予防・治療のみならず、より広い意味での「歯・口の健康づくり」の意識を高めるため、以下の通り「めざす児童像」と「研究仮説」を設定した。

○めざす児童像

- ①自身の健康に関心を持てる児童
- ②望ましい生活習慣を身につけた児童

○研究仮説

- ①児童自らが活動する場を意図的に設定すれば、自身の健康に関心を持つ児童が育つだろう。
- ②学校・家庭・地域が一体となって歯・口の健康づくりを推進すれば、望ましい生活習慣を身につけられるだろう。

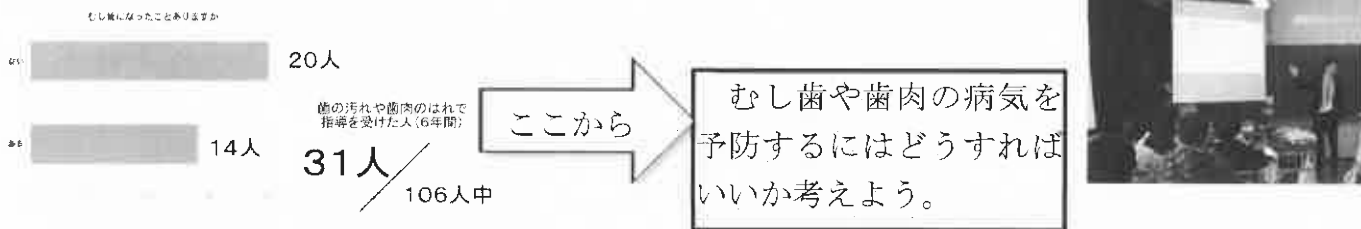
2 研究の内容

1年目の研究にあたり、これまで培ってきた授業実践を生かしつつ、「歯科保健」「安全教育」「食育」の3つの事業内容から本校の指導内容を見直し、研究授業に取り組むこととした。

3 研究実践

(1)授業研究 第6学年「病気の予防」 授業者 荻原史貴・平岩恭子(養護教諭)

【課題設定の工夫】 過去の健診結果やアンケート結果から、課題を子ども達と考えるようにした。



【むし歯や歯肉の病気になる原因を知る】

専門的な部分を養護教諭の説明や、動画を活用し理解を深めることができた。



「ミュータンス菌が食べ物などに含まれる糖分を酸に変え、その酸が歯を溶かします」



養護教諭が説明したプラークの動画をスクリーンに映すことで、むし歯の原因についてさらに理解を含めた。

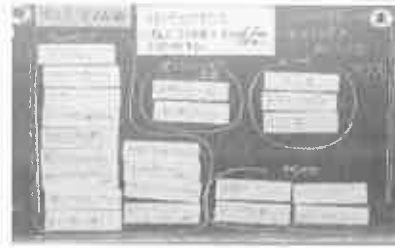
【根拠を示しながら予防策を考える】

歯ッピーファイル別冊資料を準備し、様々な視点から予防策を考えられるようにした。



自分の考えを発信

学校研究との関連
3人組で話し合いを行う



全体で共有する

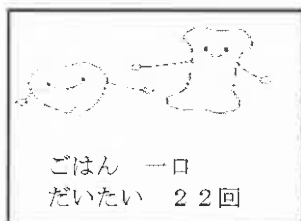
【デンタルフロスを使用した予防策を実践する】



歯間の汚れをきれいに落とす

(2) 授業研究 第2学年「たべもののはなし」授業者 塩崎史子・野口美穂（栄養士）

【課題設定の工夫】 給食の咀嚼の実態や噛むことの意識調査をもとに、課題を設定できるようにした。



ここから

かむことの大切さを考えよう。

【咀嚼の大切さ】 なぜ咀嚼することが必要なのか、普段の食生活の中から理由を考えるようにした。



一人

ペーパーサートを使い話合
いの視点の明確化

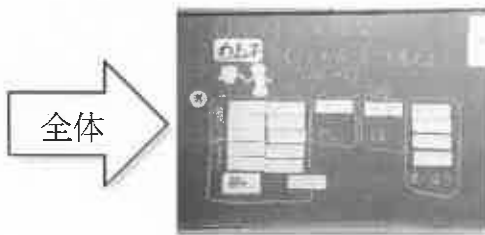


ワークシートの活用

ペア



自分の考えを相手に伝
える



全体

自分の考えと友達
の考えを比較し、
関連付けていく。

学校研究との関連
・自力解決の時間の確
保

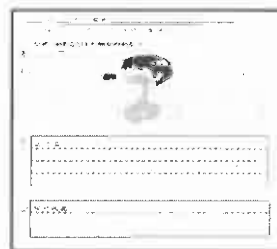
【栄養士との連携】 咀嚼についての専門的な知識を学べるように、栄養士が図を使って説明した。



【実践へつなげる】 体験活動を通して、学んだことを家庭でも実践できるようにした。



体験を通して、咀嚼の大切さについて再確認した。



家庭でも実践できるようにするために、振り返りをワークシートに記入させた。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・ 養護教諭や栄養士、歯科衛生士などの専門家と連携して指導することにより、子どもたちの歯・口の健康づくりに対する関心がより高まった。
- ・ 具体物や体験活動を取り入れる事で、子どもたちが身近な課題として捉えることができた。
- ・ 専門家と授業のねらいを十分打合せ、共通理解することによって、授業がスムーズに進み、児童の理解が高まった。
- ・ 新たな取組を0から考えるのではなく、これまでの実践をベースに工夫改善を図ったことで、ねらいが明確で児童の思考を促す授業を実践できた。
- ・ 模型やICTなど視覚に訴える工夫をしたことで、児童が知識を深めることができた。

(2) 課題

- ・ 身につけさせたい知識、技能を更に精選して授業を構成するとよかった。
- ・ 本時の課題をさらに自分の事としてとらえられるような導入の工夫が必要。
- ・ どのようなグループ学習が効果的か、見極める事が大切。
- ・ 家庭でも実践できる内容や、事後の変容なども追えると良い。
- ・ 保護者への呼びかけを多くしていくなど、家庭との連携の仕方を改善していく必要がある。

研究主題

互いによく聴き、よりよく考え、自分の思いを表現できる児童の育成
～特別活動を基盤とした学力向上～

川越市立大東西小学校

研究のポイント

- 学力向上を支える2つの柱を「学級集団の高まり・人間関係構築」「教員の確かな指導力」と設定した。
- 本研究では「教員の確かな指導力」として基本的な授業水準の維持を徹底しながら、特別活動を通して「学級集団の高まり・人間関係構築」を目指すことで学力向上を目指している。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

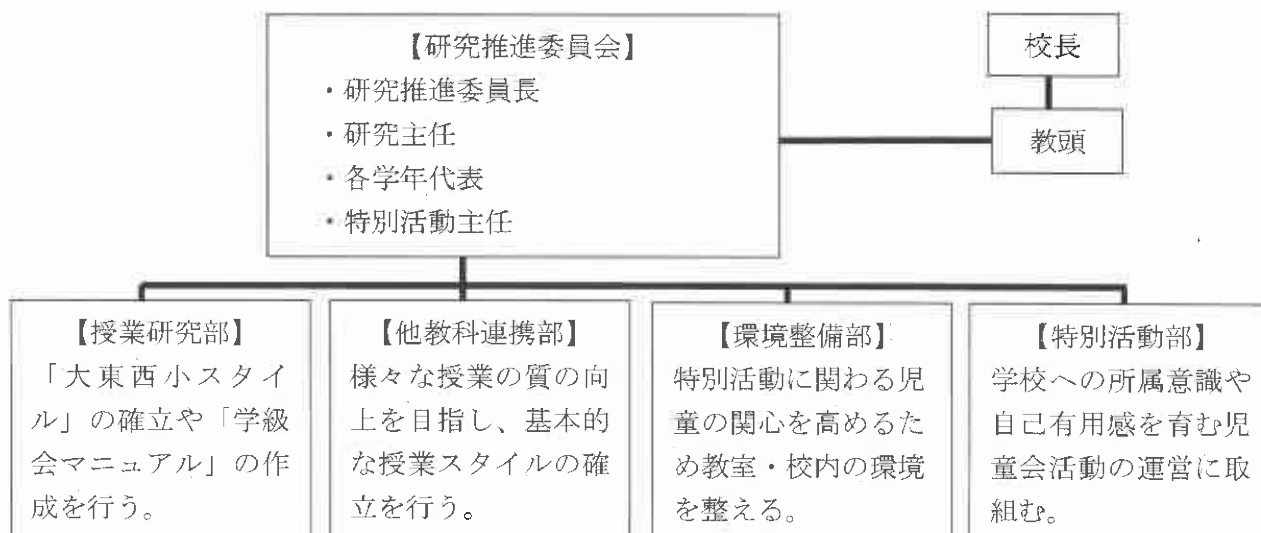
本校では認知能力と非認知能力という考え方を基に、学力向上を支える2つの柱を「学級集団の高まり・人間関係構築」「教員の確かな指導力」と設定した。その上で「教員の確かな指導力」として基本的な授業水準の維持を徹底しながら、特別活動を通して「学級集団の高まり・人間関係構築」を目指すことで学力向上を目指していく。

(2) 研究主題設定理由

本校は学力と人間関係において課題が見られる。そこでそれらの課題を解消する手段として、児童に①聴く力、②考える力、③表現する力をつけていくことを目指すこととした。また児童の力を高めるためには、全児童の発言機会の確保とその発言に対する承認体験を得やすい環境を整えることが必要である。その条件として、児童の学力差による影響が少ないこと、児童が主体的に関わることができるもの、学校生活の中で様々な形で機会を確保できることが挙げられた。さらに学級全体が一つの課題に取り組むという形式も大切にする必要がある。以上の条件を加味した結果、本校では特別活動、特に学級活動（1）における発言機会の確保や児童会活動を通じた機会確保が有効であると考えた。そこで「互いによく聴き、よりよく考え、自分の思いを表現できる児童の育成～特別活動を基盤にした学力向上～」と副題を設定することとした。特別活動における①聴く活動、②考える活動、③表現する活動が、人間関係を円滑にし、その体験を通して得た力が学力の向上につながるものと考え、学校課題の改善に努めていく。

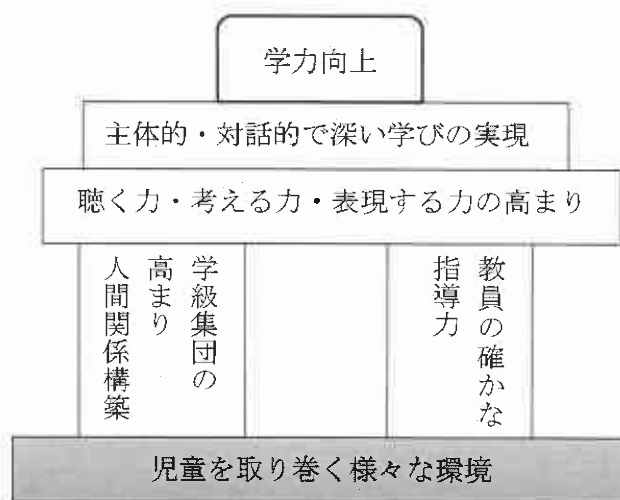
(3) 研究組織

本研究を組織的におこなっていくために研究組織は以下のように設定した。



2 研究の内容

本研究では学力向上の実現のため、学校全体での特別活動と各学級での学級会を通して「学級集団の高まり」を、特別活動以外の教科では「教員の指導力向上」を、そして学校全体の「環境整備」を行っていく。次ページに本研究の模式図を示す。模式図に示したように本研究の最終目標である学力向上という積み木は最上段に積まれている。そのために土台として、主体的・対話的で深い学びの実現が求められる。またその学びは本研究の主題である、児童の「聴く力」「考える力」「表現する力」に支えられている。しかし、この3つの力は2つの柱によって支えられた状態にあると考えられる。一つが「教員一人ひとりの確かな指導力」、もう一つが「学級集団の高まり」である。授業で教えることができなければ力がつくはずはない。しかし、教える技術だけでは児童の非認知スキル（学習を支える要素）を育てることはできない。学級経営が軌道に乗り、安心して学習できてこそ、学力は伸びるとの考えであり、これらの積み木のように学級がよくても教えられなければ意味はなく、教えるのがうまくても学級がまとまっていなければ身につかない。つまり、この2つはどちらもなくてはいけないものと考えられる。さらに直接的に働きかけるわけではないが、「児童を取り巻く環境」は土台として児童の学力を支えている。これらことから、本校では学級会を通じた「学級集団の高まり」を中心に、「教員の指導力向上」「環境整備」に取り組んでいく。



3 実践事例

(1) 授業研究部（教員の苦手意識克服と指導の統一）

① 「授業の充実を図るための8つの視点」を設定

実際に学級会を行ったり、研究協議を行ったりする際に重視すべき視点を定めた。

各学年・学級で授業の計画をする際には、児童の実態からこの視点の中でもどこに重点を置くことが効果的なのかを検討することとした。

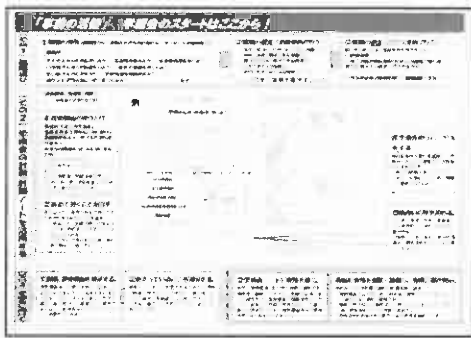
- | | |
|------|---------------|
| I | 必要感のある議題の選定 |
| II | 関連発言の重視と意見の種類 |
| III | 決まっていることの明確化 |
| IV | 少数意見の生かし方 |
| V | 反対意見の明示 |
| VI | 実践までを見通した話合い |
| VII | 3つの段階に分けた話合い |
| VIII | 振り返りの活動までを重視 |

② 「大東西小スタイル」の確立

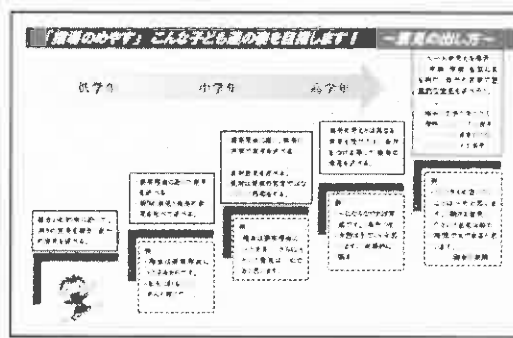
学級会を行うには、学級会ノートや議題提案カードなど様々な教具を必要とする。そこで発達段階ごとに全校統一の教具を設定し、「大東西小スタイル」とした。

③ 「学級会必携」の作成

教員の「どのように指導したらよいかわからない」という声に応えるために、平成30年度の研究で頂いたご指導等をもとに大東西小独自の教員用マニュアルを作成した。



I 事前の活動



II-i 指導のめやす ~意見の出し方~

(2) 環境整備部 (子どもの活動の見える化)

① 学年・学級に応じた学級会の記録の掲示を実施

学級会に関わる様々な記録を児童の言葉や写真などを織り交ぜながら学級壁面に掲示する。なお掲示内容については以下のように学級・学年の実態に応じて多様なものとしている。

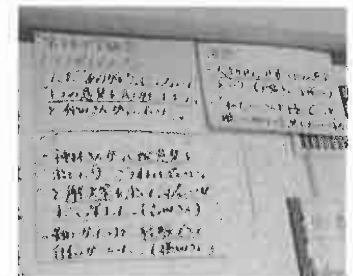
【学級会記録① 決定したことの記録】

1年生では自分たちが話し合って決定したことを学級の壁面に掲示した。1年生でも掲示することで、クラスのことを話し合いたいという意識を持たせる。



【学級会記録② 次の課題を明示】

振り返りカードに書かれた話し合い活動の中でよかったことや次への課題を教室壁面に掲示し、全員で共有する。また、実践でのよかったことや課題も合わせて掲示する。クラスをよりよくするために必要なことを考えるきっかけ作りになることを目指している。



② 議題の木・議題の実の掲示

学級会を行うにあたり「どのような議題を設定していいかわからない」「児童から議題が出てこない」などの意見が寄せられた。このことから“議題の見える化”を狙い、議題の木を設置した。

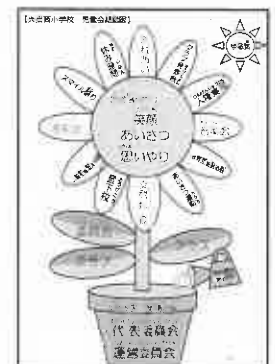


低学年はピンク、中学年がイエロー、高学年がブルーの“議題の実”にクラスで行った議題を書き、学期ごとに貼っていくことで、自分の学年はどの時期にどんな議題を学級会でとりあげているのか、児童も教師も分かるようになった。

(3) 特別活動部の取組 (自治的な児童会活動の推進)

① 児童会組織の再編成

児童会活動は縦割り班、クラブ活動、委員会活動と多岐にわたっている。そこで学校生活の様々な場面に関わりをもつこととなる児童会組織を代表委員会を中心に再編成した。また児童に対しては右図のようにイラストを使って組織図を示すことで親しみやすくした。





(4) 他教科連携部の取組（教師の意識化）

児童の「聴く力」「考える力」「表現する力」を高めていった上で、さらなる学力向上のために特別活動以外の授業での基本的なスタイルを全校で統一した。

授業の流れが統一されると、児童は見通しを持って授業に参加することができる。また授業をする教員も迷わずに授業の構成を組み立てることができる。そこで以下のように授業の基本的な流れを設定した。また各学級で使用できるように板書用マグネットを配布した。

- | |
|---|
| I 問題・・・本時にみんなで挑戦し解決すべき問題
II めあて・・・本時に必ず達成すべきこと・理解すべきこと
「まとめ」とは裏と表の関係でつながっている。
III 考え・・・個人の考えを元に集団で考えていく。
i 考え ：個人の考えをノートなどに書く
ii 出し合う：個人の意見を集団の場に出す。
iii 比べる ：意見同士を比較検討する。
iv まとめる：めあて達成のために意見をまとめる。
IV まとめ・・・本時の内容をまとめる。「めあて」とは裏と表の関係でつながっている。
V ふりかえり・・・本時の学習を通して自分自身がどのような学びを行ったかを振り返る。 |
|---|

4 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・学級会必携を作成・活用し、指導の統一・徹底ができるように取り組むことができた。
- ・実践を重ねていく中で、児童が自らの思いを進んで表現できるようになり、互いを思いやる発言が見受けられるようになってきている。学級会に必要感や期待感を感じている児童が増え、よりよい人間関係の構築につながっている。

(2) 課題

- ・意見の発表ではなく、「話し合い」になるようにしていく。関連発言（ぼくも～。〇〇さんと同じように 等）や心配意見の改善策、話し合いの進行に関わる意見など、意見の種類を増やせるようにしていくことで、みんなで話し合い、みんなで解決していく学級集団を形成していきたい。
- ・令和2年度以降は学級活動以外の授業での基本スタイルの定着に力を入れていきたい。

研究主題

「霞ヶ関小学校、霞ヶ関南小学校との小中一貫教育を見据えて」

川越市立霞ヶ関小学校・霞ヶ関南小学校・霞ヶ関中学校

研究のポイント

- ① 9年間の系統的で継続性の高い指導により「豊かな学び」を実現し、生徒が主体的に学習し、学ぶ喜びを実感できる授業を実践する。
- ② 生徒の自己肯定感を育む児童生徒交流、スムーズな小中連携のための協働授業や児童生徒・教職員の交流行事など多岐に渡る連携行事を行う。

1 研究の概要

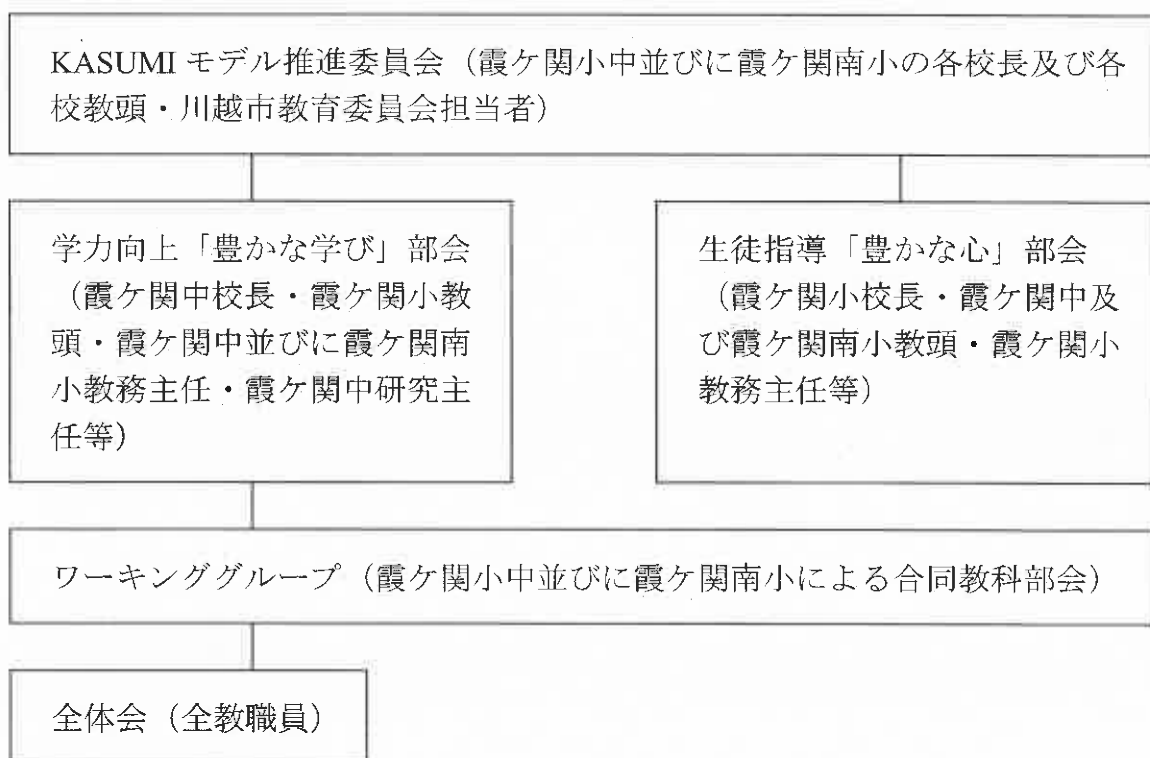
(1) 研究のねらい

平成30年度の研究『霞ヶ関小学校、霞ヶ関南小学校との小中一貫教育を見据えて』を一層推進するために、学力の向上と学校不適應の解消に向けた取組を継続、発展させる。

(2) 研究主題設定理由

本校学の大きな課題である、学力の向上と学校不適應の解消を目指して、平成29年度・30年度と小中一貫教育を見据えた様々な取組を実践してきた。その一つが教育課程上の連携を推進するための「9年間を見通したカリキュラム」の編成であり、もう一つがスムーズな小中連携のための協働授業や児童生徒・教職員の交流行事である。今年度、さらに継続して研究を推進することとなり、今までの成果を基に、教師の授業における指導力を経験年数によらず向上させるための共通指導事項及び指導の流れをモデル化し、霞ヶ関小・霞ヶ関南小とも共有すること、小中が連携した積極的な生徒指導、協働授業や児童生徒・教職員の交流行事の充実を図りたい。

(3) 研究組織



2 研究の内容

- (1) 昨年度までの霞ヶ関小の研究成果である、「主体的・対話的な学び」を軸とした授業過程、「Kasumi Style」を霞ヶ関小学校及び霞ヶ関南小学校並びに霞ヶ関中学校で統一して使用できるようにする。
- (2) 共通生徒指導項目「かすみ BASIC」の検証と見直し。
児童生徒交流の充実。

3 実践内容

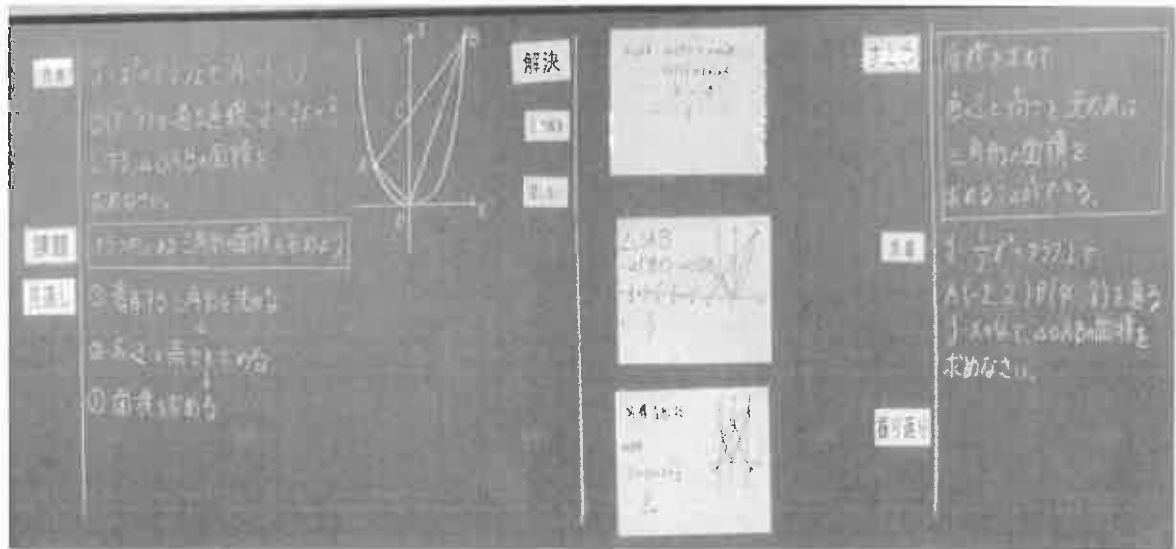
- (1) 組織的な研究推進と「目指す児童生徒像」の共有

第1回 KASUMI モデル推進委員会において、霞ヶ関小学校及び霞ヶ関南小学校並びに霞ヶ関中学校で共有する「目指す児童生徒像」について協議した。川越市の目指す子ども像、3校の各学校教育目標、校区の課題を踏まえて『ふるさとで学び、志高く未来を拓く霞ヶ関の子どもたち』とした。

KASUMI モデル推進委員会は1ヶ月に1回、年間8回行われ、会場は3校で輪番とした。学力向上「豊かな学び」部会及び生徒指導「豊かな心」部会での協議内容・課題等の共有、スケジュール確認等を行っていった。

- (2) 基本的な授業展開の共有と板書カード

昨年度までの霞ヶ関小の研究成果である、「主体的・対話的な学び」を軸とした授業過程、「Kasumi Style」を他教科、小中でも統一して使用できるように工夫し、板書カードという形で実現した。



上の図は、数学の授業での板書だが、構成は小学校と同様である。板書カードも同じものを使用している。カードを使用して学習の流れを示すことで、子どもたちは、今何をするのか、何をしなければならないのかを瞬時に理解でき、授業の終わりには1時間の学習の足跡を振り返ることができるようになった。

そして、各教科の基本の学習過程を「課題」→「見通す」→「解決」→「まとめ」→「振り返り」と小中で統一して行うことにした。

- (3) 協働授業の充実

中学校の教員が小学校に出向いて、小学校の教員とT・Tで授業を行う。今年度は算数3回《霞小》、理科5回《霞小3回・霞南小2回》、社会1回《霞小》、外国語活動8回《霞小》、音楽5回《霞小》、保健体育1回《霞小》、家庭科3回《霞小》、クラ

ブ活動（コンピュータ）1回《霞小》の実施ができた。

(4) 児童生徒交流の充実

霞小・中特別支援学級交流会《2回》、霞小・中合同避難訓練及び引き渡し訓練、小・中合同あいさつ運動《霞小4回・霞南小2回》、霞中後期生徒総会を霞小6年生3名が参観し感想発表、霞中陸上部有志と霞南小児童と一緒に持久走練習《1回》、霞中3年生（総合的な学習の時間で音楽を選択）が音楽朝会で合唱を披露《霞小・霞南小各1回》、6年生体験入部《霞小・霞南小とも1～3回》を実施した。



霞ヶ関南小学校での小・中合同あいさつ運動（令和元年10月12日）



霞ヶ関小学校での音楽朝会（令和元年12月3日）

事後の職員アンケートには、「小学生から『お兄さん』『お姉さん』と慕われ、先輩としていつもよりしっかりとした態度が取れていた。」「普段、中学校で活躍の場が少ない生徒も、小学生との交流の場なら『役に立っている』という実感を得ることができる場合がある。中学生がミニティーチャーになる場面を増やしてはどうか。」といった感想があった。また、小学校の教員からは、「合同音楽朝会は、低学年の子どもたちが中学生に憧れを抱くいい交流だと思う。毎年、子どもたちから『声がきれいだった』『あんなふうに歌えるようになりたい』という感想が出る。」「中学生と一緒にあいさつ運動ができるというのは、特に6年生にとって良いと思った。中学校への不安感がなくなるので。」といった声が聞かれた。

(5) 研究発表に向けた3校合同職員会議及び合同教科部会の実施

授業公開を含む研究発表会を開催することが決まり、その準備のための合同会議を実施した。具体的には、12月2日（月）に全体会及び各教科部会、12月10日（火）及び1月10日（金）に各教科部会が行われ、学習指導案の最終検討や各分科会でのプレゼンテーション準備（霞中・霞小・霞南小の小中一貫教育を見据えた昨年度の取組及び今年度の取組の振り返り、並びに合同教科部会で研究してきた授業改善に向けた取組のまとめを行い、それをプレゼンテーションソフトに落とし込む作業等）をし

た。そして、1月15日（水）・1月20日（月）にプレゼンテーションのリハーサルをした。教職員には負担をしいたが、各合同教科部会で短期間に複数回の会議を持てたことにより、相互理解が深まり、2年間で自分たちが取り組んできたことの再確認と今後の課題の認識ができたことと思う。

4 研究の成果と課題

(1) 成果

① 子どもの情報交換と授業の基本的スタイル共有

・小中合同の研修会や小中合同教科部会の回数を重ねたことにより、教職員の相互理解及び情報交換を通じた児童生徒理解、異校種理解が深まった。

・教科ごとに公開授業に向けた準備を進める上で、「主体的・対話的な学び」を軸とした授業過程、「Kasumi Style」を全教科、小中で統一して使用できるように工夫し、板書カードを作成した。

② 児童生徒の交流によって自己有用感・自尊感情を育めたこと

・中学校区の小学生と中学生が様々な交流をすることで、互いに知り合い、小中の壁を低くすることができる。また、小学生は中学生に憧れを持つことにより自分を成長させたいと強く思い、中学生は小学生に慕われ、憧れられることを通じて自己有用感・自尊感情を高め、よりしっかりしようと思うようになる。そのような交流の機会を昨年度より増やせた。来年度は回数だけでなく、内容の面で一層の工夫・充実を図りたい。

(2) 課題

① 児童生徒交流の機会不均等

・霞ヶ関中学校と霞ヶ関南小学校とが離れているため、協働授業もそうであるが、交流の機会が県道を挟んで隣接する霞ヶ関小学校に比べ少ない。

② 協働授業の調整

・教科によって実施回数に偏りがあることと、小中の物理的な距離と学校規模の違いから、どうしても霞ヶ関南小学校での回数が少なくなってしまうことが課題である。学校行事等の都合で、当初計画されていた協働授業が中止になってしまった教科もあった。また、協働授業の実施に当たって事前打ち合わせの時間や事後の評価と反省の時間を調整し確保することの負担も少なくない。

③ 霞ヶ関西小中学校も含めた5校による小中一貫教育を見据えた取組の推進

霞ヶ関南小学校の卒業生は、霞ヶ関中学校及び霞ヶ関西中学校に入学する。そして、霞ヶ関西中学校には、霞ヶ関南小学校と霞ヶ関西小学校の卒業生が入学する。そのことを考えたとき、小中一貫教育を見据えた様々な取組は、霞ヶ関西小中学校も含めた5校で共有されないと完結しない。

研究主題

「外国語活動及び外国語科の効果的な指導方法について」

～自信を持って外国語活動・外国語科の授業を行うために～

川越市立山田小学校

研究のポイント

- 新学習指導要領完全実施に向け、指導方法を学び、自信を持って授業を行えるように準備を進める。
- 教師が英語指導に対する自信を深めることで、児童が英語に慣れ親しみ、英語力の素地を養えるという考え方で校内研修を進める。
- AETとの連携や、英語ボランティアの活用の仕方を工夫していく。
- 英語ルームをはじめ、校内の環境整備を進める。

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

令和2年4月の新学習指導要領完全実施に向けて、研修の充実や英語に関する指導方法を多くの教員が身に付けていくことが急がれている。

そうした中、本校では平成30年度より2年間、川越市教育委員会から「外国語活動及び外国語科の効果的な指導方法について」の研究指定を受け、外国語活動・外国語科のモデル授業を提案するために校内研修を進めることとなり2年目を迎えた。

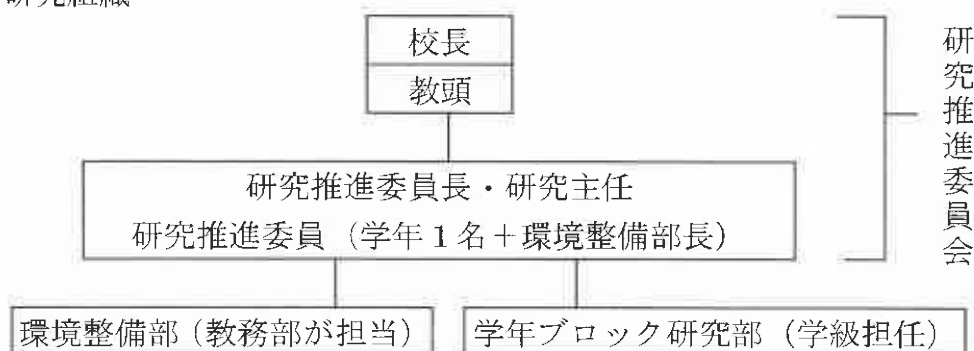
本研究は、外国語活動・外国語科の効果的な指導方法についての研修・授業実践を通して自信を持って指導に当たれるようにすること、川越市内の先生方に研究・研修の成果を広めることを目的に取り組んでいる。

(2) 研究主題設定理由

本校の「外国語活動」では、担任がAETと協力して授業を進めており、担任主導で授業を進めることが定着している。

しかし、新学習指導要領完全実施を来年度に控え、中学年では外国語活動、高学年では外国語科完全実施となることでより多く外国語の授業を行うことになり、研修の充実が急務であると考えます。そこで、「指導方法の研究」に特化して校内研修に取り組むことを決定し、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織



2 研究の内容及び実践経過

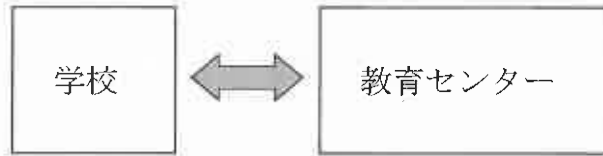
(1) 構想 ～自信を持って外国語活動・外国語科の授業を行うために～

指導法が明確になり、自信をもって授業を行える (教師)



児童が進んで活動に参加でき、英語力の素地が養われる

(児童)



<協力・連携>

- ①指導方法の研修 (授業・講演会・校内研修)
- ②環境整備
- ③先進校の取組を参考にする

※児童の実態からスタートし、研究仮説を立てるというスタートではなく、教師の指導力向上を中心に据えて研修を進めた。

(2) 専門部の取組

① 学年ブロック研究部 (研究主任が積極的に関わる)

- ア 授業の進め方。
- イ HRT と AET の役割分担 (AET との打ち合わせ)
- ウ 学習指導案の作成
- エ 学習支援ボランティアの活用方法

② 環境整備部

- ア 掲示物を作成する (天気・あいさつ・曜日・月・数等)
 - ・英語ルームや階段部分、教室掲示
- イ 英語ルームの活用の仕方 (PC・TV・ホワイトボードの設置場所や活用)
- ウ 3年生以上のクラスに日付 (月・日・曜日) の黒板掲示を配布する



(3) 研究主任を中心とした校内研修

①模擬授業

②ショート研修

(月曜日放課後の職集後、5～15分)

・ Classroom English , Teacher Talk , Chant , etc

③ロング研修

(木曜日の研修日、30分～1時間)

・ 模擬授業、展開の仕方、部会等

(4) 授業研究会及び講演会の実施

①校内夏季研修・講演会 (R1.8.21)

埼玉大学教育学部言語文化講座

教授 及川 賢 様

「小学校における英語指導で大切なこと」



②校内研修ブロック別授業研究会 (R1.9.24)

・ 授業 5年 Unit 5 “She can run fast. He can sing well.” 木村瑠璃 教諭

・ 高学年ブロック研究協議会

・ 指導講評 埼玉大学教育学部言語文化講座教授 及川 賢 様

③校内研修ブロック別授業研究会 (R1.9.26)

・ 授業 4年 Unit 5 “Do you have a pen ?” 小島綾香 教諭

・ 中学年ブロック研究協議会

・ 指導講評 川越市立教育センター指導主事 稲葉知己 様

④校内研修ブロック別授業研究会 (R1.10.29)

・ 授業 1年 Unit8 “What number?” 鎌倉聖悟 教諭

・ 低学年ブロック研究協議会

・ 指導講評 川越市立教育センター指導主事 松本礼香 様

⑤川越市教育委員会指定学校研究事業

・ 授業 2年 “What's this ?” 村山 宙 教諭

3年 Unit6 “ALPHABET アルファベットとなかよし” 木元亜莉沙 教諭

6年 Unit7 “My Best Memory” 福島修嗣 教諭 AET Dorian Andrews

特別支援学級 “Let's enjoy party” 斉藤 優 教諭

・ 指導者 埼玉大学教育学部言語文化講座教授 及川 賢 様

川越市立教育センター指導主事 稲葉知己 様

川越市立教育センター指導主事 松本礼香 様

川越市立教育センター分室リベラー指導主事 宮崎洋平 様

・ 講演会 埼玉大学教育学部言語文化講座教授 及川 賢 様

「小学校における英語指導で大切なこと」

⑥校内研修・講演会 (R2.1.29)

埼玉大学教育学部言語文化講座教授 及川 賢 様

「2年間のまとめにあたって」

⑦授業研究会後の授業者へのフィードバック

研究授業用のフィードバック用紙を作成し、授業を見る先生方が記入し、授業者に渡すようにした。研究協議以外にも、自身の授業の細かい点について知ることができる機会となった。



3 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・校舎内階段の諸掲示関連の工夫改善を行ったことで、身近な英語の表現を授業とは違った場面でも視覚的に接することができた。
- ・特別支援学級での外国語活動を行ってよかった。日常的な表現を学ぶことができ、効果的であった。
- ・スモールトークの工夫。聞きたくなるようなスモールトークの工夫（意外性を持たせる）をしたことにより、子どもたちがより活動に興味をもって取り組むことができた。
- ・指導法が確立してきた。AETと教師の役割分担が明確になった。



(2) 課題

- ・「慣れ親しむ」が学校として明確な基準をもつ必要があった。たとえば、「発話量を〇〇%以上確保できた授業が慣れ親しんでいる授業」と基準を設定し取り組めると具体的な研究になった。
- ・AETの話した内容を担任が毎回訳すのではなく、児童に繰り返し言わせることが大切である。担任がAETに続いて繰り返し話すことを意識して授業を展開したい。
- ・AETとの打合せ時間の確保が難しい。



研究主題

「他と関わりながら学び、わかる・できる・生かす児童の育成」
～ユニバーサルデザインの視点を大切にした国語科・算数科・体育科の指導を通して～
川越市立高階小学校

研究のポイント

- 2020年度から始まる次期学習指導要領の趣旨に則った「主体的・対話的で深い学び」、能動的な学習を目指すための合理的配慮（ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり）
- 埼玉県立総合教育センター「学力向上BOOKLET・ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり12のポイント」を参考にした研究である。
- 児童の学力向上は勿論、教員の授業力向上を目指した研究である。
- 児童にとって、学習内容の理解に妨げになってしまう原因を見つけ出し、それを取り除くことによって、安心して授業に取り組み、学習意欲を高められる。
- ユニバーサルデザインの視点を大切にした授業作りを3教科で行う。

1 研究の概要

（1）研究のねらい

本校は学校教育目標「なかよく かしこく たくましく」を受け、どの子ども学習において「わかった！」「できた！」という喜びを味わい、学校生活を有意義に過ごしてもらいたいと本校教職員の強い思いから、児童自らが進んで学習に取り組む姿を目指すため、次の4つを本研究のねらいとした。

- ①誰もが安心して学習に取り組める学習環境を整えること。
- ②「主体的・対話的で深い学び」を達成させる能動的な学習過程を工夫すること。
- ③児童が自信を持ち、意欲的に学習に取り組もうとする態度を育成すること。
- ④互いに認め合い、励ましあって何事にも取り組むもうとする児童の育成を図ること

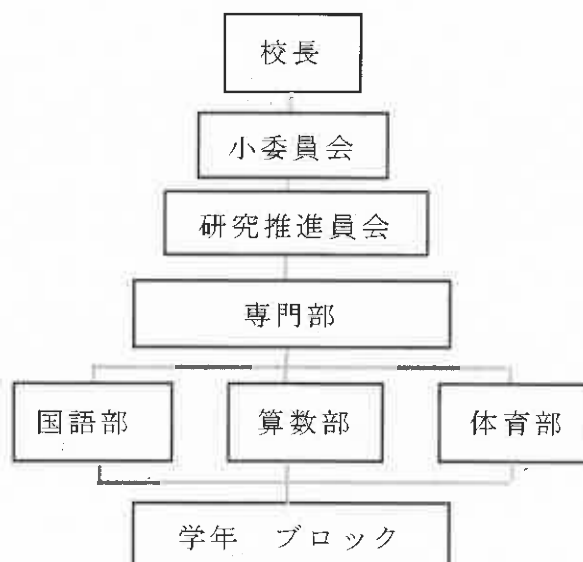
（2）研究主題の設定理由

本校の児童は、学力・体力とも2極化という現状が見られた。県学力学習調査においては、学力のレベルが低い児童の割合が県平均と比べると多少多いこともわかった。年度当初に教職員にアンケートを行った結果では、児童に身につけさせたい力として、「基礎学力」「目標を持ち、がんばり続ける力」「コミュニケーション能力」「自ら考え、発信する力」「体力・運動の技能」などが上げられた。そこで、昨年度から研究していた、「ユニバーサルデザインの視点を大切にした算数科授業の実践」を継続するとともに、基礎学力・体力の向上を目指し、教科を国語科・算数科・体育科と範囲を広げて、取り組むことにした。次期学習指導要領でキーワードとなっている「主体的・対話的で深い学び」を実践し、教職員の授業力向上、児童の学力向上を目指し、本研究主題を設定した。

(3) 研究組織

1 3教科の研究が各学年に偏ることなく、学校全体としての研究になるよう、研究組織を以下のように設定した。

- (1) 小委員会
 - ・研究主題、研究の進め方を提案。
- (2) 研究推進委員会
 - ・研究主題の決定、研究仮説、手立て、研究の具体的な進め方を提案
- (3) 専門部
 - ・各学年少なくとも一人ずつ在籍し、各教科の具体的な仮説に対する手立て、モデルプランの立案
 - ・授業実践後のまとめ・発表
- (4) 学年 ブロック
 - ・研究授業の実践



2 研究の内容

研究 テーマ	他と関わりながら学び、わかる・できる・生かす児童の育成 ～ユニバーサルデザインの視点を大切にした国語科・算数科・体育科の指導を通して～
-----------	--

〈めざす児童像〉

他と関わりながら学ぶ

- ①友達との考えの交流 深め合い 学び合う
- ②身近な人（地域の方々・家族・教員など）、物（具体物）、こと（様々な場面）との出会い、経験との関わりから意欲的に学ぶ

わかる

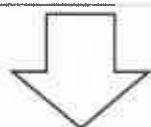
- 学習したことを身に付ける子供 友達のかえや思いを理解できる子供

できる

- 自分たちで問題解決できる子供 自分で人間関係を良くしようと気づける子供

生かす

- 学習したことを生活に生かす子供 良い人間関係を広め、より良く生活しようとする子供



仮説

ユニバーサルデザインの視点を大切にした授業を展開すれば、児童の学習意欲を喚起するとともに、「分かる・できる・生かす」児童の育成を図ることができるだろう。

視点① ユニバーサルデザインの授業展開の工夫

視点② ユニバーサルデザインの視点を取り入れた学習環境

3 実践事例

1 学年 授業研究の記録

1 授業日

令和元年10月17日(木)

2 教材名

おはなしをよもう『サラダでげんき』

学習活動	主な発問と児童の様子
1 前時の想起	◎前時までの学習を振り返り、簡単な質問をすることで、本時の意欲付けを行う。 仮説1 見通しを明確にもたせる。
2 本時の課題	単元の流れ・一時間の授業の流れの提示 課題 すずめは、なにをおしえてくれたらう。
3 見通し	◎学習する場面の確認 ⑤の場面を読めばよい。 仮説1 課題解決に対する見通しを明確にもたせる。
4 音読	◎一斉読み、個人読みを行う。指で文字を追いたい児童は、机の上に教科書を置いて読ませる。
5 自力解決	◎教科書にアンダーラインを引かせ、ワークシートに記入 仮説1 一時に一事の指示。明確な指示
6 話し合い	◎ペアで自分の考えを発表し合う。 仮説1 参加の促進 仮説1 個への対応・期間指導 仮説2 場の構造化・ペア
7 全体での発表	◎話し合ったことをもとに、自分の考えを発表する
8 まとめ	◎自分のことばでまとめを書く。 →ワークシートにまとめる。出だしは共通。前時のまとめ方と同様の形。 仮説1 個への対応・期間指導
9 振り返り	◎音読をする。感想を交流する。

◎3教科で、一時間の授業の流れを記したモデルプランを作成。

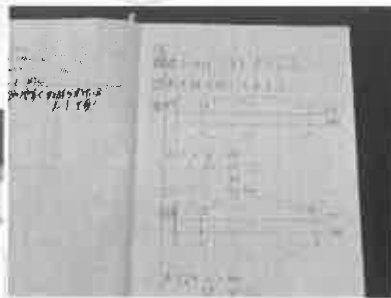
その他の実践

(算数科)



小集団指導

共通したノート指導



励まし・認める姿勢

(国語科)



ICTの活用



グループでの話し合い

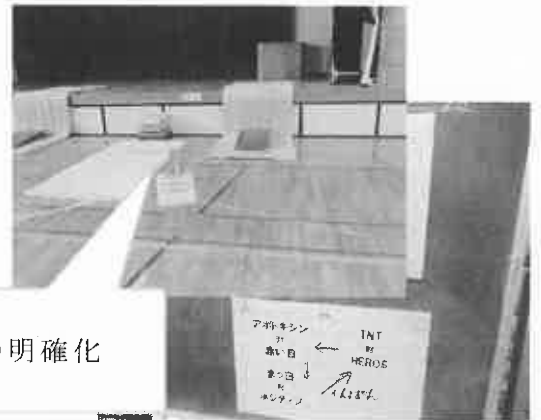
(体育科)



単元・一時間の授業
の流れの明確化



作戦ボード



場の明確化

(成果○ 課題●)

- ユニバーサルデザインの視点を大切にした学習環境を整えることで、児童は授業の見通しがもて安心して学習に望むことができた。
- モデルプランを作成することで、全教職員が共通理解のもと、意図的にペアやグループでの活動を取り入れることができた。「主体的・対話的で深い学び」に繋がってきている。
- 児童のやる気を喚起できるような導入の仕方や発問の工夫や、教師自らが認めほめることで、児童は自信を持ち学習意欲の向上に繋がった。
- より積極的に『主体的・対話的で深い学び』の場を設け、さらに思考力表現力の向上を目指す。
- 基礎学力の定着を図るためには、ドリル学習の確実な実践も必要になる。

「自ら命を守る」実践的な防災教育

川越市立寺尾小学校

研究のポイント

- 児童の発達段階に合わせた防災教育
- 「自ら命を守る」新たな避難訓練の計画と実践
- 小中連携を見据えた研修

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

本校は、秩父から川越まで続く地盤強固な台地の南東部境界線の外に位置するため、地盤が緩く地震に弱い。あらゆる地域で大地震が起こる可能性が指摘されている近年では、住居等の損壊が心配される地域である。

また、新河岸川付近という立地条件のため、大雨や台風による水害が危惧される地域でもある。さらに、校区内は土地が低く、実際に浸水等の被害が度々起こっている。

学校の責務として、そのような非常事態が発生したときにおける児童の生命を守ることをねらいとして、本研究に取り組んだ。

(2) 研究主題設定理由

大地震や浸水等の大きな災害が起こったとき、1学級で30名ほどの児童を預かる担任の避難行動や、管理職による指示伝達等がすべて順調に進んでいくことは困難である。そこで、児童自身が自ら命を守る行動を身につけることが重要であると考え、昨年度まで行ってきた避難訓練等について、より実践的な活動となるよう検討した。

2 研究の内容及び実践事例

(1) 児童の発達段階に合わせた防災教育

まず、慶應義塾大学環境情報学部 大木聖子准教授による授業を見ることから研究を始めた。6年生に向けた授業では、「地震の恐怖」「毎日地震が起きる可能性がある」「地震が起きたら何が危険か」等、日常の教室写真を用いながら、現実にも即した授業が展開された。物が「落ちてこない」「倒れてこない」「移動してこない」場所が安全であるということを知識と体験の両面から理解させる内容（写真1-1）である。

児童は、日常の写真の中に自分たちを投影させながら、危険な箇所を探したり、机やいすの異なる特別教室での避難初期動作（写真1-2）をお互いに見合ったりして、興味関心をもちながら学習した。



(写真1-1)



(写真1-2)

1年生に向けた授業では、6年生に向けた授業とは全く違うアプローチで、楽しみながら体験学習ができた。細かい知識を授けるのではなく、音楽とダンス（写真2-1）で踊りながら避難初期動作のポーズ「ダンゴムシ（ひざまずいて頭を抱える）」（写真2-2）「サル（机の脚を持って頭を隠す）」「アライグマ（腰をかがめて手で鼻と口を覆う）」を身に付けることを重視し、練習した。その後も、競争ゲームを取り入れたポーズの訓練がくり返された。



(写真2-1)



(写真2-2)

本校では、この授業を内容別に高学年（4～6年）と低学年（1～3年）に分けて、全学年で実施した。また、授業後2～3週間以内に、各学級で4回避難初期動作のショート訓練も実施した。それにより、子どもたちの避難訓練時の初期動作が格段に速くなった。

大木先生には、違う視点での授業も見せていただいた。そこからヒントを得て、次年度からは前年度と違う内容の授業を実施していくよう安全教育部を中心に検討を進めている。

(2) 「自ら命を守る」新たな避難訓練の計画と実践

昨年度まで、当たり前のように行っていた「災害発生」→「放送による避難指示」→「防災ずきんの準備」→「校庭へ避難」といった流れや内容を修正した。

①災害発生時の初期動作は、それぞれ違う。大地震では動けない。

<研究前>・教室の場合は机の下にもぐる。

<研究後>・きちんと机が動かないよう押さえる「サル」のポーズをとる。

- ・机から離れている場合や給食配膳中、休み時間等の場合は、その場で「ダンゴムシ」ポーズをとる。
- ＜研究前＞・校庭にいる児童は中央に集合する。
- ＜研究後＞・その場で「ダンゴムシ」ポーズをとる。
- ②放送による避難指示は、できないことが多い。
 - ＜研究前＞・放送の指示を待って、初期動作や避難行動をとる。
 - ＜研究後＞・訓練の際、最初の警報以外の放送を使わない。
 - ・自己判断で、その場所に合った初期動作（ポーズ）をとる。
 - ・地震のときは、教室から出ないで（その場から動かないで）教職員や知らせに来る人の情報を待つ。
- ③防災ずきんは必要ない場合がある。
 - ＜研究前＞・いつも防災ずきんをかぶって避難する。
 - ＜研究後＞・災害によって、かぶらない場合を検討している。
- ④校庭へ避難することは、けがのリスクが高い。校舎は一般家屋の1.5倍ほどの強度がある。
 - ＜研究前＞・必ず、最後は校庭へ集合する。
 - ＜研究後＞・そのまま教室で待機し、放送による訓練の反省や講評を行う。
 - ・他の災害対応を考え、校庭へ避難する訓練も残すことを検討している。

このように、昨年度までの避難訓練の内容を修正し、初期動作を確実にするため、ショート訓練（3分程度）を増やした。場面設定としては、授業中の教室内だけでなく、給食中や休み時間、トイレや校庭等で警報を聞く児童がいる状況で行った。

今年度は主に地震対応を訓練したが、竜巻対応（写真3）も行った。



（写真3）

（3）小中連携を見据えた研修

今年度は、寺尾中学校とともに指定校研究を行い、お互いの研修や授業を参観することで、自分の学校での取組に活かすことができた。

①中学校の理科学習「地球の中身」（夏季休業中）

- ・防災教育や小中連携に直接つながるわけではないが、地球のつくりが分かる画像による教材（写真4-1）と粘土を使ったミニ地球づくり（写真4-2）で、小学校高学年の知識でも取り組めるような内容だった。



(写真4-1)



(写真4-2)

②中学校の防災教育「洪水対応」

- ・洪水に巻き込まれるまでの避難のチャンスを、時系列で確認していく教材（写真5）で、寺尾地区にはかなり身近な内容だった。
- ・小学生でも、興味関心をもちながら対話形式で進めていけるような内容だったが、今年度は現実に浸水被害があったため、実施を見送ることにした。



(写真5)

3 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・安全な避難方法を考えるきっかけとなり、実践的な訓練を実施できたことで、児童が「自ら命を守る」ことを心身ともに体得できた。
- ・次年度の引き渡し訓練同日実施計画等、小中連携がさらに深まった。

(2) 課題

- ・地震、水害、不審者等から児童を守るための多様な計画を検討する。

「主体的・対話的で深い学びの実現」

～防災教育を通してこれからの社会を生き抜く力の育成～

川越市立寺尾中学校

研究のポイント

- 「自分の身は、自分で守る」ことができる生徒の育成
- 保護者、地域を巻き込んだ「防災教育」の推進
- 小中連携を見据えた研修

1 研究の概要

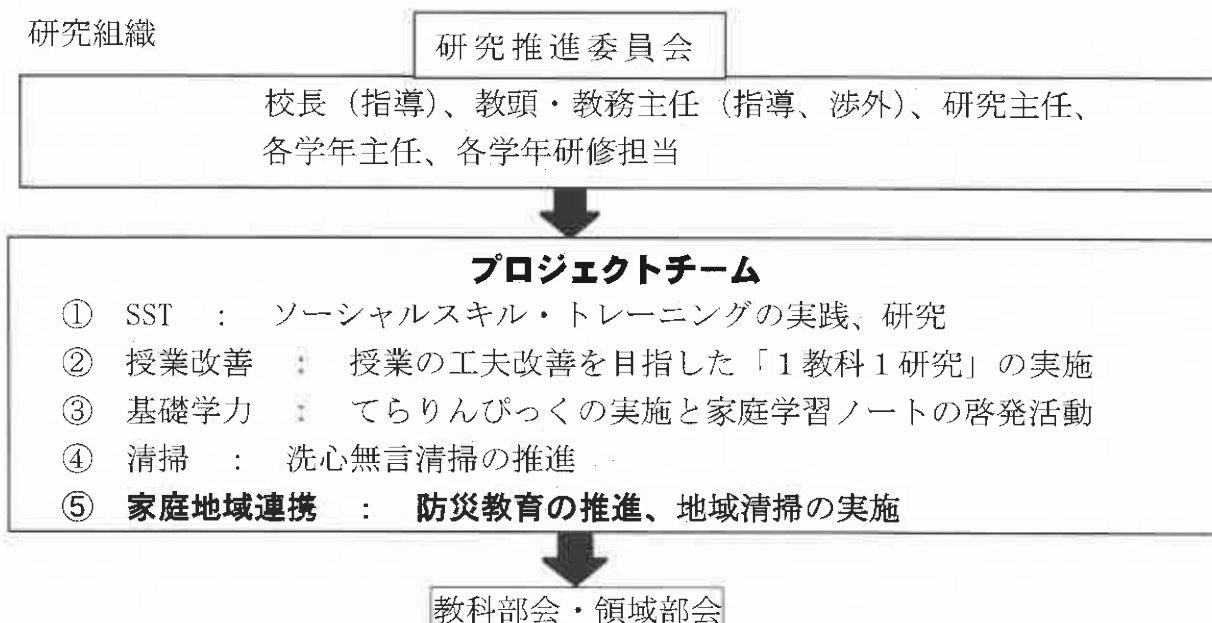
(1) 研究のねらい

今年度の学校研究主題を「主体的、対話的で深い学びの実現」～これからの社会を生き抜く力の育成～とした。研究方針を「P3Challenge 寺尾」3つのP「Pride 誇り」「Passion 情熱」「Prospects 期待」の向上、地域に愛され、信頼され、期待される学校を目指し、課題解決に「Challenge 挑戦」し続け、切磋琢磨する教職員として前年度までの研究に加え、「ソーシャルスキル・トレーニングに関する研究」と「防災教育の推進」に取り組んだ。

(2) 研究主題設定理由

平成29年10月に大きな水害で地域とともに被災した経緯がある本校では、学校経営を進めるにあたり、保護者、地域を巻き込み「防災教育」に取り組む必要があると考え、今年度、川越市教育委員会の研究指定を受け、慶應義塾大学環境情報学部准教授大木聖子氏の指導のもと研究に取り組んだ。

(3) 研究組織



2 研究の内容及び実践事例

(1) 年間の取組

期 日	事 業 内 容	場 所	対 象
4月15日	校内研究推進委員会（研究計画・組織等）	校長室	推進委員
4月22日	防災教育出前授業	各教室	生徒
4月27日	第1回避難訓練・引き渡し訓練	各教室	全教員
5月31日	集団下校の地区グループ確認（地域清掃を利用して）	校区内	生徒
7月13日	引き渡し訓練の振り返り	各教室	保護者等
8月21日	小中合同防災教育研修会	校 内	全教員
8月23日	理科実験教室（防災教育を含む）	教 室	希望生徒
9月 2日	第2回避難訓練・集団下校	各教室	生 徒
10月	防災マップづくり	学区内 各教室	2年生徒
1月20日	校内研修（まとめ）	P C室	全教員

(2) 実践事例

① 引き渡し訓練

昨年の校長対象の安全教育研修会において大木准教授からの講義を受け、大規模災害では中学生も保護者への引き渡しが必要とのご指摘をいただいた。川越市の防災マニュアルでは、中学校では「震度5強」の場合、生徒を留め置き、教員が通学経路の安全確認後、引率し集団での下校となっている。しかし、教員が引率して集団で下校することは、その下校中に2次災害の発生の危険性があるとのことであった。

水害による被害の記憶が新しい中で、防災教育に取り組むことが、学校、家庭、地域をつなぎ、子どもの育成にもつながると考えた。

ア 引き渡し訓練の実施に向けた準備

- ・引き渡し訓練を行ったことがない教職員の実態からPTA会長、役員への相談を前年の2学期から開始した。
- ・接続小学校と同日実施する計画を立てたが、まずは本校単独での引き渡し訓練の実施とした。
- ・ゴールデンウィーク初日の4月27日(土)に、土曜授業日を設定し、6校時に避難訓練・引き渡し訓練を計画した。
- ・「生徒カード」、「緊急連絡カード」を新規に作成し、「緊急時引き渡し者名簿」を「緊急連絡カード」に組み込んだ。

イ 4月27日(土) 避難訓練から引き渡し訓練へ

・避難姿勢 → 安全確認 → 教室での引き渡し



避難姿勢



避難姿勢



引き渡しの様子

ウ 引き渡しの状況 在籍生徒数400名(訓練当日) 欠席10名

・事前に引き取りに来校できないと連絡があった生徒 20名

・当日実際に引き取りに来られなかった生徒 4名

99%の家庭で引き取りに来ていただいた。

② 防災教育

ア 生徒対象：本校の実態に合わせた「防災教育」

○防災学習①～地震対応編～

4月22日(月) ※クラスごとに実施

○集団下校

5月31日(金) ※地域清掃を利用して



防災学習①

○理科教室～夏季学習会～

8月23日(金) ※参加生徒38名



集団下校・地域清掃

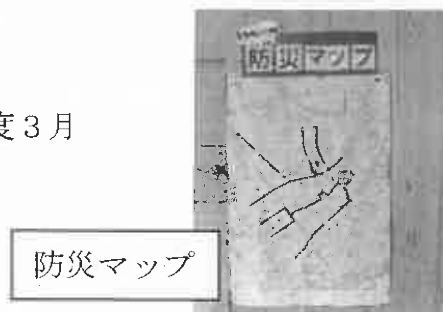


理科教室

- 防災学習②～水害対応編～
9月18日(水)※学年ごとに実施
- 防災地域学習
9月 2日(月)※地区別に下校及び危険箇所
の確認
- 「防災マップ」作成
10月 ※2学年で作成・掲示



- イ 教職員対象：小中連携した「防災教育」
 - 寺尾小中防災教育年間計画打ち合わせ 前年度3月
 - 川越市安全教育研修会での報告
8月5日(月)
 - 小中合同防災教育研修会
8月21日(水)



- ウ 保護者地域対象：保護者、地域を巻き込んだ「防災教育」の推進

- 引き渡し訓練 4月27日(土)
 - *中学生の引き取りが必要なことの理解を進める。
- 防災教育通信「だんごむし」配布説明
7月13日(土)
 - *各種訓練の際の保護者の意識啓発を図る。
- 「防災地域学習」の見守り 9月2日(月)
 - *地域の自治会長には、災害発生時には、地域の状況を確認することを依頼し、生徒を下校させる際の目安とする。



3 研究の成果と課題

(1) 成果

- ・教職員が防災教育の重要性を理解し、今後も防災教育を継続して推進していく効果を述べる意見が多くでた。
- ・本校として初めて、引き渡し訓練を実施することができた。
- ・1年間の防災教育のまとめとして、防災マップを作成し、昇降口に掲示し、防災意識の向上につなげることができた。
- ・小中合同研修会を行い、小・中で防災教育を進めることができた。

(2) 課題

- ・PTAや小学校と連携を取り、寺尾小・中合同の引き渡し訓練を実施する。
- ・小中合同の防災教育計画を作成する。
- ・他の接続2小学校との防災教育をどのようにすすめていくか。
- ・水害に対する防災教育をどのようにすすめていくか。

「中学校における巡回相談を活用した特別支援教育」

～困り感の大きい生徒へ具体的な手だてを～

川越市立大東中学校

研究のポイント

- 県立特別支援学校の巡回相談の活用
- 特別な配慮を要する生徒の個に応じた具体的な指導
- 校内のインクルーシブ教育の向上

1 研究の概要

(1) 研究のねらい

県立特別支援学校の巡回相談を活用し、個々に応じた具体的な指導方法を学び、校内のインクルーシブ教育の向上を目指す。

(2) 研究主題設定の理由

職員はインクルーシブ教育や合理的配慮の必要性は理解しているが、日々の忙しさの中で目の前の困り感のある沢山の生徒に具体的にどのような指導を行えば効果的なのか戸惑うことが多い。そこで、①困り感の大きい生徒の特性を特別支援学校の専門家先生に観察・診断していただき、より深い生徒理解へ繋げ、個々に応じた指導を行う。②学校・学級環境も含めてインクルーシブ教育を浸透させ、職員のさらなる意識向上を図りたいと考えた。

2 研究内容

＜本校の特別支援の取り組み＞

- (1) 年度当初の職員会議・研修でインクルーシブ教育について確認し、具体的な手だて（合理的配慮）の認識の共有や支援の必要な生徒の共通理解を行う。
- (2) 週1回の教育相談部会（各学年教育相談担当、校長、教頭、養護教諭、さわやか相談員、スクールカウンセラー、特別支援教育コーディネーター）各クラスで気になる子供や相談室、保健室への来室生徒の状況等についての情報共有・対応、対策を話し合う。
- (3) 特別支援教育支援員による学習支援（毎週金曜日午前）
教育相談部会等であげられた配慮を要する生徒に対して、授業内容を確認しながら学習の補助活動にあたっていただく。
- (4) 巡回相談の活用
昨年度から埼玉県立川越特別支援学校及び川越市立特別支援学校が実施している巡回相談を活用し、各学年の配慮を要する生徒について個別の支援方法を助言・指導をいただく。

< 1 学期実施日 >

- ①6月13日(木) 2・3年観察
- ②6月20日(木) 2・3年指導
- ③7月 4日(木) 1年観察・指導

< 3 学期実施日 >

- ①1月29日(水) 1・2年観察
- ②2月13日(木) 1・2年指導
- ※3年生は卒業なので1・2年を中心に観察・指導いただいた。

< 巡回相談の流れ >

- ①各学年、学習に対して困難を抱えている生徒をあげる。
- ②本校特別支援教育コーディネーターが依頼（配慮を要する生徒の人数、特徴、困っていること伝える等）と日程調整・参観していただく授業等の連絡を行い、学校から正式に要請する。

学年	実施日	実施内容	備考
1年	7月4日(木)	1年観察・指導	
2年	6月13日(木)	2年観察	
2年	6月20日(木)	2年指導	
3年	1月29日(水)	3年観察	
3年	2月13日(木)	3年指導	

③観察の日に対象生徒を中心に授業参観していただき、当日または後日具体的な支援について指導をいただく。事前に用意したものは、座席表（各担任）と当日の時間割である。当日の朝、簡単な確認（授業の実施場所等）のための打ち合わせをし、最初に校内の案内をした後は自由に見ていただいた。1学期は、1つの学年で3～4人を2時間かけてじっくり観察していただいたので、観察・指導は3日間を要した。

④観察のあとの指導は、県立川越市特別支援学校の特別支援教育コーディネーターが観察の結果を紙ベースで用意してくださり、それをもとにして担任が順番に聞いたり、空き時間の教員が聞いたり、代表者が聞いたりして指導を受けた。その後、学年会で共通理解を図る方法をとった。昨年からの取り組みで、2・3年生に関しては、本人のよい変化なども細かく具体的に確認でき、さらなる専門的なアドバイスもいただけるので、本人にとっても教員にとっても次につながる重要な取り組みになっている。

(5) 夏季研修 8月23日(金) 10:00～11:30

講師：県立特別支援学校特別支援教育コーディネーター 横田一美 様

演目：「学習への困り感を持つ生徒の指導の実際及び保護者との連携Ⅱ」

～個の特性をどう捉え、どう指導するか～

< 研修の内容 >

- ・ 学習面での困難さのある
生徒の進学先選択のポイント
- ・ 県立高校の実際と特別支援学校の
実際
- ・ 2学期からの進路指導をどう進
めていくか
- ・ 大東中生徒事例研修（生徒4名）
事例研修で熱が入り30分延長
した。



< 講義内容から >

- ・ 学ぶ意欲、自己肯定感、努力を続けるコントロール力、生活リズムの安定の大切さ
- ・ 将来の生活を豊かにする進路を考える大切さ（自分の状況を肯定的に理解する。）
- ・ 具体的に上尾鷹の台、新座、鳩山高校の通級の状況、川越たかしな分校等の高校の情報をお話をいただいた。
- ・ 生徒事例研修では、事前の巡回相談での観察や担任への「チェック票、気になる生徒の学習面・行動面のチェックリスト」「学習に困難さのある生徒への支援と進路指導について」の調査をもとに、本人の困難さ改善（緩和）へのアプローチ方法をアドバイスいただいた。

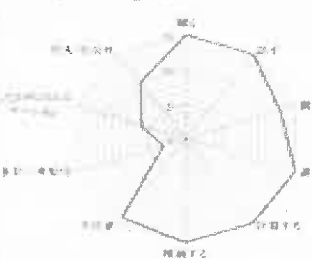
夏休み研修資料



本人の困難さ改善（緩和）へのアプローチ

困難さ	学習面	<ul style="list-style-type: none"> ① 指導の工夫（授業・教材のしかけ） ② 個別の配慮（参加の促進） ③ 個に特化した指導（理解・スキルの指導） ④ 課外の補習、別な課題の準備、家庭の学習協力
	生活面	<ul style="list-style-type: none"> ⑤ 授業・学統学年経営の工夫による自己肯定感の向上・学習意欲の喚起 ⑥ 教育相談 ⑦ 生活リズムの安定（家庭の協力） ⑧ 他機関との連携（医療、行政、警察、福祉、通級指導教室、特別支援学校等）

3年 Aさん

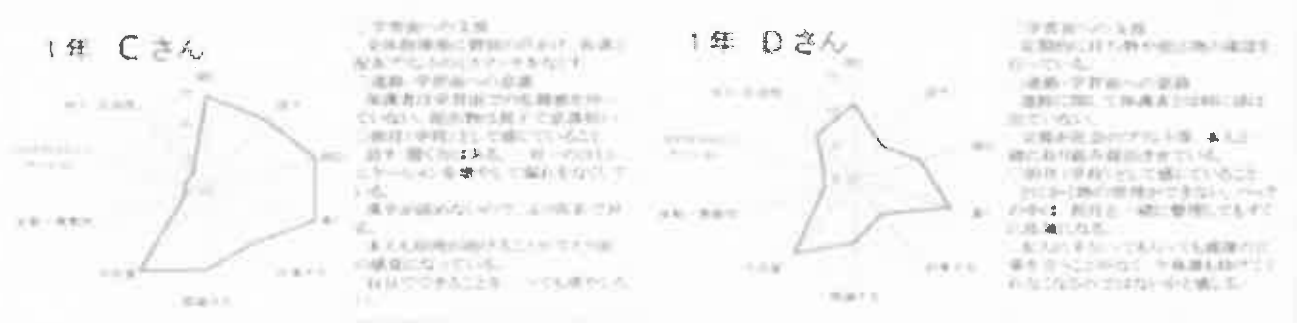


① 学習面への支援
座席を教室前方へ配慮、通時がかけ見掛けできるよりにしている。
持ち物や提出物の確認を毎日行う。
② 進路・学習面への支援
手帳取得後、特支学校を受検予定、定期テスト前は保護者が付き添い学習時間確保、提出物も母親が支援。
③ 担任(学校)として感じていること
漢字暗記テストは合格できる。
繰り返し作業はできるが、段階を踏むものは難しい。指示がないと動けない。生活面を含めて周りの生徒のアプローチが必要な現状。

2年 Bさん



① 学習面への支援
座席を教室前方へ配慮、通時がかけ見掛けできるよりにしている。
② 進路・学習面への支援
本人の意思は強い。在習高校を卒業予定。教師会にも参加予定。保護者は個別見の良さに感謝。
③ 担任(学校)として感じていること
漢字暗記テストは合格できる。
繰り返し作業はできるが、段階を踏むものは難しい。指示がないと動けない。生活面を含めて周りの生徒のフォローが必要な現状。
今後具体的に声かけて、自分で取り組む自分で判断し、行動し解決できる場面を増やしたい。



- ・具体的には、①学習面への支援、②進路学習面への意識、③担任（学校）として感じていることに分けられた、細かなその子に適した助言であり、2学期からすぐに活用できるものであった。また、事例生徒について2学期からの進路指導をどう進めていくか、活発な話し合い活動も入り充実した研修となった。

3 研究の成果と課題

巡回相談を利用した取り組みは、昨年度から2年目であり、困難を抱える生徒に継続して指導していただけたことが本年度の大きな成果となった。学齢や成長にあわせて出てくる新たな問題にも本人のことを知る先生に来ていただいて、専門的な目で見えていただけた。そのご指導により、学習面や生活面、保護者へのアドバイスも含めて、普段気づかない細かいことまで、気づくことができ、具体的な対応に繋げていくことができています。

また、こちらの忙しさを配慮して対応していただき、大変ありがたかった。本来指導時には職員全員で話を聞き、情報を共有することが望ましいが、本校の忙しさを配慮していただいた結果、3日間も来校いただくこととなった。共通理解するための時間確保が今後の課題である。さらに、教員の困難さを抱える生徒への思いや理解の差にも課題がある。簡単に発達障害だからとレッテルを貼った目で見たり、普通学級ではなく特別支援学級（学校）へと安易に口にする姿も見られる。「障害のあるものが教育制度一般から排除されないこと、自己の生活する地域に置いて初等中等教育の機会が与えられること、個人に必要な合理的配慮が提供されることが必要」というインクルーシブ教育の考えは研修等で周知されていることである。

色々な教育環境の課題や困難は確かにあるが、教師自身が生徒の幸せを祈り、人間として尊重し、大切に思っていくことが、日々の教育の礎になる。生徒にあわせる指導・生徒に寄り添う指導を目指し、生徒一人一人が生き生きと学ぶ学校となるよう、日々研鑽を重ねていきたい。

研究主題

「学力の向上を図る教育活動の充実」

～授業の質の向上を目指して～

川越市立霞ヶ関中学校

研究のポイント

- ① 「対話的な学び（小グループによる話し合い活動）」を授業に取り入れることを通して学力の向上を図る。
- ② 児童・生徒の実態に応じて分かりやすい授業を展開することにより、主体的な学びを実現する。

1 研究の概要

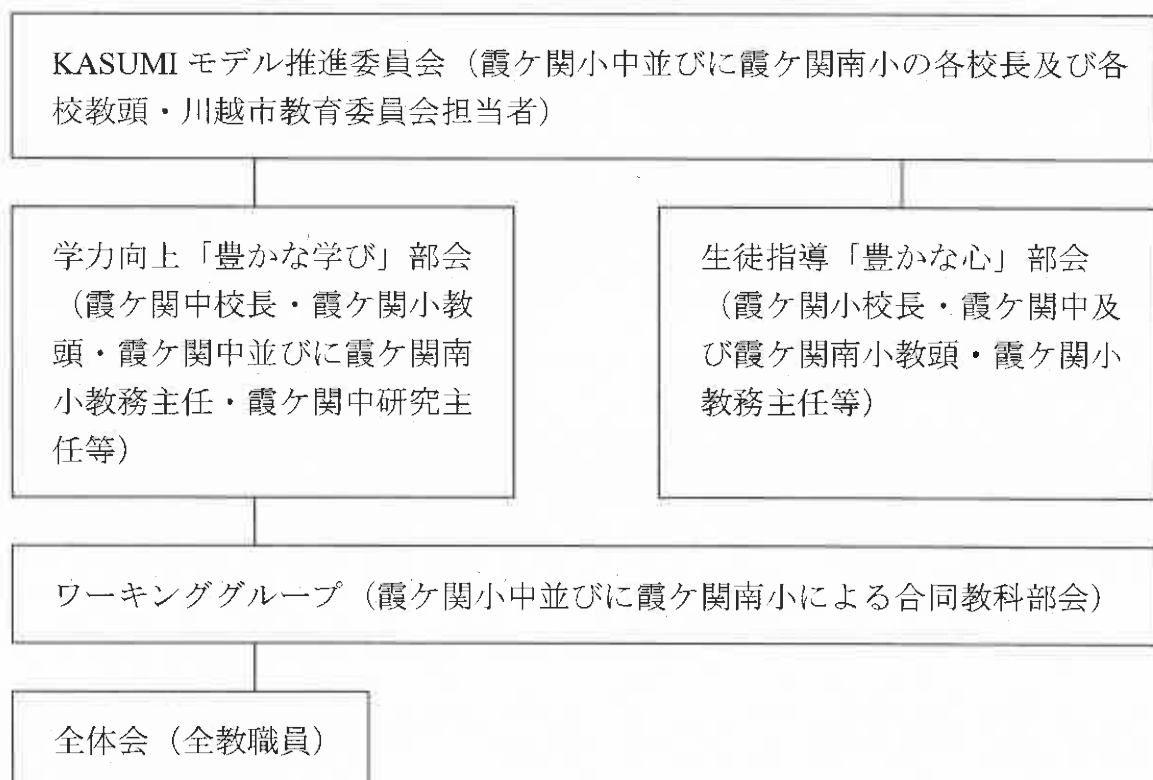
(1) 研究のねらい

平成 30 年度の研究『学力の向上を図る教育活動の充実 ～授業の質の向上を目指して～』を一層推進するために、小中が連携して児童生徒の「思考力・判断力・表現力」を育む授業のスタンダードを構築し、実践する。

(2) 研究主題設定理由

昨年度には『かすみスタイル（授業規律、協働授業の実践）』及び『かすみラーニング（個別学習支援、補習、家庭学習の定着）』は実践できている。今年度はそれを基礎に、教師の授業における指導力を経験年数によらず向上させるための共通指導事項及び指導の流れをモデル化し、霞ヶ関小・霞ヶ関南小とも共有することで、さらなる学力向上を図りたい。

(3) 研究組織



2 研究の内容

- (1) 全教員が川越市教育委員会の指導により年間2回の授業研究会を実施することを通して、授業における共通指導事項及び指導の流れを共通理解し、実践できるようにする。
- (2) 学力向上を目指した授業のスタンダードを市内小中学校に発信する。

3 実践内容

- (1) 昨年度までの積み上げの継続と充実

- ①家庭学習の奨励、自主学習ノートの点検と表彰

生徒は、自主学習ノート（A4／80ページ）1冊をやり終えると学期末、終業式の場において名前を呼ばれ、後で担任から賞状を手渡される。

- ②補習授業（Kゼミ）

定期テスト前・長期休業中、2学期末の朝（3年生）

- ③学習掲示

各階廊下や階段の所々に教科別の掲示コーナーを作り、授業で学習したことや基礎的・基本的な事項の問題と正解、新聞記事、生徒の成果物（見本となるノート・提出物等）、3年生では高校入試の必須事項など、機に応じて内容を変えた。

- ④マンスリー・レポート

教職員の主体的な研修

- (2) 研究授業及び研究発表の実施

全教諭が年間2回以上、指導者を招聘して研究授業を実施した。1月24日（金）には音楽（霞ヶ関小学校でT・T）を除く8教科と特別活動・特別支援教育（自立活動）の授業を公開し、各教科・領域で研究の成果をプレゼンテーションした。

- (3) 小中合同での授業改善

川越市教育委員会から提案された仮説をもとに、小中で連携、統一した授業改善を進めた。

仮説1 意図を明確にした話し合い活動を設定すれば、対話的な学びが充実し、授業のねらいにせまる学びとなるのではないか。

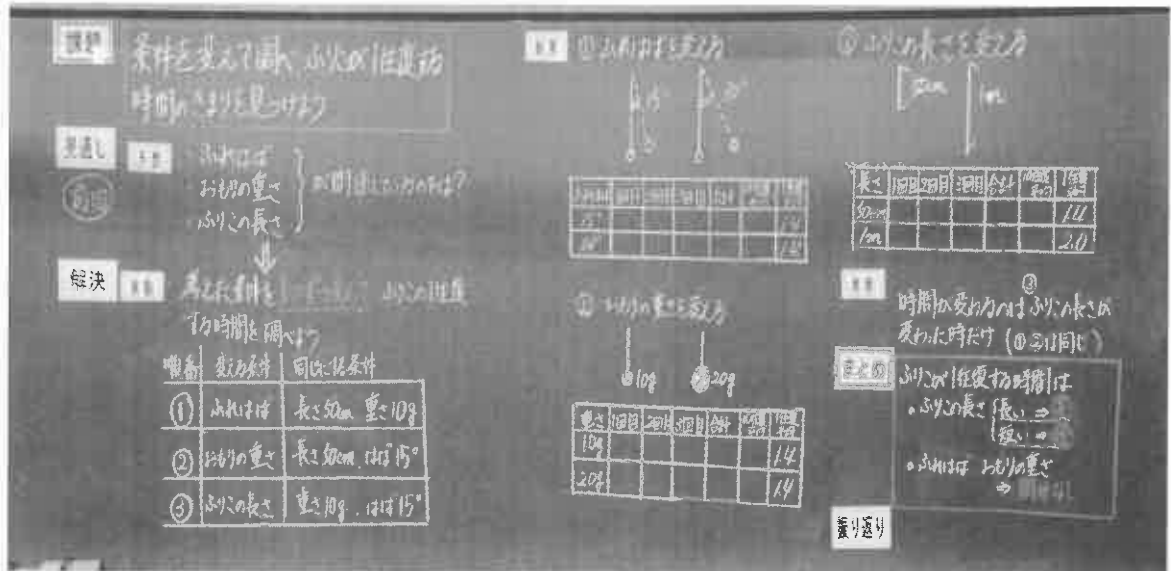
この仮説について、霞ヶ関小の研究で明らかになったことを小中一貫の視点で検証し、さらに深い学びへとつなげることにした。

- ① 問題解決的な学習過程（Kasumi Style）の継承発展
- ② 視点を明確にした対話的活動
- ③ 振り返りによる学びの手ごたえ

昨年度までの霞ヶ関小の研究成果である、「主体的・対話的な学び」を軸とした授業過程、「Kasumi Style」を他教科、小中でも統一して使用できるように工夫し、板書カードという形で実現した。

次ページの図は、理科の授業での板書であるが、カードを使用して学習の流れを示している。今何をするのか、何をしなければならないのかを瞬時に理解でき、授業の終わりには1時間の学習の足跡を振り返ることができるようになった。

そして、各教科の学習過程を「課題」→「見通す」→「解決」→「まとめ」→「振り返り」と小中全教科で統一して行うことにした。



仮説2 児童・生徒の実態に応じた授業を行えば、わかりやすい授業を展開することができ、主体的な学びを実現できるのではないか。

評価規準に照らした評価に応じて、個々の児童生徒に対応した手立てを明確にすることを実践した。また、学習活動で児童生徒がどのような反応をするか複数パターン予測し、教師は具体的に児童生徒にどのタイミングで、どのような声かけをすればよいのか等、授業の目標を達成するために必要な展開、道筋を考え抜き、授業準備を進めるようにした。

(4) 「令和版 みんなでやろう」「授業中における声量レベル」の全教室掲示

昨年度作成した「授業の受け方8ヶ条 みんなでやろう！」(①あいさつ ②発表の仕方 ③返事 ④机上の整理整頓 ⑤ノートを取り方 ⑥授業準備 ⑦話を聴く姿勢 ⑧授業への参加態度)の掲示に加え、今年度新たに「令和版 みんなでやろう」「授業中における声量レベル」の全教室に掲示し、適時、指導を行った。

<p style="text-align: center;">令和版 みんなでやろう。</p> <p>○聞き方</p> <p>その一 正しい姿勢(背筋を伸ばす)で聞く。</p> <p>その二 必要に応じてメモを取る。</p> <p>○話し方</p> <p>その三 指名されたら「はい」と返事をする。</p> <p>その四 全員に聞こえる声で発表する。</p> <p>その五 発表する内容は伝わりやすく、最後まで(「～です」「～ます」)はっきり発表する。</p> <p>その六 授業内で場に応じた適切な言葉遣いができる。</p> <p>○書き方</p> <p>その七 正しい姿勢で、丁寧に書く。</p> <p>その八 板書を書き写すだけでなく、大事なところは色分けするなどノートを工夫して書く。</p>	<p style="text-align: center;">授業中における声量レベル</p> <p>レベル1 無音 声を発していない</p> <p>レベル2 隣の生徒が聞こえる声</p> <p>レベル3 班の生徒が聞こえる声</p> <p>レベル4 クラス全体に聞こえる声</p> <p>レベル5 教室の外まで聞こえる声</p> <p>先生に指示に従い声量レベルを調整しよう。 授業中の不規則発言には気をつけよう。</p>
---	--

4 研究の成果と課題

(1) 成果

① 教師の授業力の向上

・生徒アンケートでは、「あなたは、自分の力で学習問題を解決しようとしている。」の質問に「とても思う」と答えた生徒が1学期末 34.7 %から2学期末 41.8 %に、「とても思う」と「少し思う」合わせた割合が 83.3 %から 85.5 %に上昇した。

これは、各教科の授業で、個別課題解決の時間 → 小グループによる話し合い活動という展開を意図的に取り入れてきた結果によると思われる。

・児童生徒の学力を授業によって向上させるという目的の下、協働授業や研究発表に向けた小中合同教科部会を複数回実施してきたことにより、小中で「主体的・対話的な学び」を軸とした授業スタイルが共有された。

・研究発表の公開授業に臨んだ教諭は、川越市教育委員会指導主事等から個別に何度も指導を受けて当日を迎えた。また、授業公開しなかった教諭も2回の授業を観ていただき、学習指導案の事前指導を含めるとやはり4回以上の個別指導を受けている。どの教諭も1回目の研究授業より質の高い授業を2回目の授業で実施するべく準備してきたことで、力を付けたはずである。

② 9年間を見通した単元別カリキュラムの活用

平成30年度に単元ごとにつながりを示した系統表を作成し、9年間を『基礎期』、『拡充期』、『発展期』の3つに分けてそれぞれの段階に応じた育てたい力を示したことにより、小学校で学習した内容を導入で使ったり、定着の状況など生徒の実態を把握するのに役立てたりすることが容易になった。授業に臨む教員も、小中の接続をより意識するようになった。

(2) 課題

① 合同教科部会を実施するに当たっての時間確保

児童生徒にとってより質の高い授業を提供していくには、個々の教員の指導力の向上はもとより、小中の接続・児童生徒や地域の実態把握・個別の支援計画等が霞ヶ関小・霞ヶ関南小・霞ヶ関中学校で共有されなければならない。そのためには少なくとも教科単位で年に複数回の会議を持つ必要がある。その時間確保と調整が難しい。

② つなぎ教材の作成

今年度、教科ごとに小中の学習内容の接続を意図した「つなぎ教材」を作成する計画があったが、そのための時間が確保できなかった。来年度は、小中合同教科部会の中に「つなぎ教材」を開発・作成するための時間を設定し、作成したものを実際の授業で使う。